ドキドキブレイド

ホミキ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不死身の怪物アンデッドと戦い単独封印を成功させた剣崎一真、だが倒れている女の子を見つけてしまう。その正体はトランプ王国を滅ぼしたジコチューと戦うキュアソード剣崎真琴だった。利害の一致でライダーとプリキュアは共に戦い、物語は真実に向かってゆく

目次

第一章　下級アンデッド編
二人のスペード♠ ―― 1
ボード壊滅 ―― 16
二人のハート♡ ―― 40
ボロボロの橘 ―― 60
二人のダイヤ♢ ―― 87
目覚めるクローバー♣ ―― 128
剣崎兄妹 ―― 150
バレちゃったキュアソードの正体 180
第二章　最強のライダー編
囚われた剣崎 ―― 215

第一章　下級アンデッド編

二人のスペード♤

タックル
ブレイド「はぁぁぁぁっっっ‼?‼?」
ブレイド「ウェイ‼?」
リザードアンデッド「ぐあっ！」
ブレイド「よし、バックルが開いた‼?カードをあいつに向かって投げれば封印できる」
ヒュンヒュン！
リザード「ぐあああああ‼?」
ヒュンヒュン！
ブレイド「…」ガチャ
剣崎「ふぅ」ガチャ
剣崎「よっしゃー‼?初めて一人でアンデッドを封印した！みんなを守ったぞ‼?」
剣崎（最初ライダーにスカウトされた時は怪しい話だと思ったけど、こんな俺でも人

を助ける仕事につけたんだ！）

プルルプルル‼？

剣崎（あ、橘さんから電話だ）

剣崎「橘さん！」

橘「その様子だとアンデッドを封印したらしいな」

剣崎「はい！これも全部先輩の橘さんが俺に戦い方を教えてくれたおかげです！俺これからも頑張ります！ライダーとして‼？」

橘「いい心がけだ、だがまだまだ封印されてないアンデッドは大量にいる。ライダーになったからには最後まで倒れるんじゃないぞ？」

剣崎「勿論ですよ橘さん。あ、そういえば橘さん。最近体は大丈夫なんですか？」

橘「…」

剣崎「橘さん？」

橘「大丈夫だ、お前が心配することは一つもない、お前は自分の心配をしてろ。これからも頼りにしてるぞ剣崎。そうだ今日飯でも行かないか？お前の単独撃破記念だ」

剣崎「はい！ありがとうございます橘さん‼？じゃあ今日の夜行きましょう！」

橘「夜６時に豚のしっぽ亭にこい、場所はメールで送っておくからな。じゃあまた後でな剣崎」

剣崎「ありがとうございます橘さん‼?」ピッ
剣崎「やっぱり一流だよな橘さんは、俺なんか足元にも及ばないや。でも今日俺は一人でアンデッドを封印したんだ！いつか俺も一流のライダーに…」
剣崎「‼?」
剣崎（紫の髪の女の子が倒れてる⊠さっき逃げ遅れたのか?）
剣崎「おい‼?君‼?大丈夫か⊠」
真琴「…ん」
剣崎「はぁよかった…話せるか?」
真琴「ここは…?」
剣崎（可愛そうにアンデッドに連れてこられたのか?）
剣崎「ここに来る前のことは覚えてるか?」
真琴「ここに来る前…?」
真琴（私はアン王女と一緒に逃げてだけど、ベールに追撃されてそれでアン王女は…）
真琴「戻らなきゃ‼?」
剣崎「ヴェ‼?」
真琴「王女‼?アン王女‼?どこですか⊠どこにいるんですか⊠王女‼?」
剣崎「ちょちょ‼?落ち着け君‼?何があったんだ！」

真琴「…何も…何も…アン王女すらも…う、うわあぁぁぁぁあああん‼?‼?」

剣崎「落ち着いたか?」
真琴「ありがとうございます…すみませんご迷惑おかけして…」
剣崎「何があったんだ?さっき王女とか言ってたけど、俺でよければ話聞くよ?」
真琴「いや大丈夫です…私の問題なので…」
剣崎「そうか…最近は物騒だから気をつけてね」
真琴「はい、ありがとうございます…」
剣崎「送ってこうか?」
真琴「いえ、一人で帰れます…」
剣崎「そっかじゃあ気をつけてね」
真琴「はい…」
剣崎（大丈夫かな?あの子?）

ダビィ「真琴大丈夫ビィ?」

真琴「ありがとうダビィ私もいつまでも泣いてるわけにもいかない、この世界にもきっと王女様がきているはず、王女様を探さないと」
ダビィ「探すって、どうやって探すつもりビィ？」
真琴「まずはこの近くを探してみるわ」

豚のしっぽ亭
あゆみ「いらっしゃいませー何名様ですか？」
剣崎「あぁ待ち合わせで」
橘「来たか剣崎！こっちだ」
剣崎「あの人です、」
あゆみ「かしこまりましたではどうぞ」
剣崎「いやー橘さん今日は本当にありがとうございます」
橘「気にするな、お前にもここのオムライスを食べてほしくてな」
剣崎「そんなにうまいんですか？ここのオムライス？」
橘「まぁ食べてみればわかる」
あゆみ「マナ？」

マナ「はーい☒お母さん？」
あゆみ「ちょっとこのオムライス、あっちのお客様に持っててくれる？」
マナ「いいよ！」
マナ「あ、橘さん！」
橘「やぁマナちゃん」
マナ「今日は小夜子さんは一緒じゃないんですか？」
剣崎「ヴェ！誰ですか‼？橘さん！」
橘「なんでもない！」
剣崎「橘さんも隅に解けないなー」
橘「…マナちゃんありがとうここに置いてくれ」
マナ「はい！お待たせいたしました！当店自慢のオムライスです！」
剣崎「ありがとう、うわぁ美味しそうだな！」
橘「食ってみろ剣崎」
剣崎「はい！いただきます‼？」
パク
剣崎「う、うまいですよ橘さん‼？すごく本格的ですよ橘さん‼？何でこんなにうまいんですかね？」

マナ「それはですね、お父さんの愛が詰まっているからですよ」
剣崎「愛かー！なんかいいなそういうの！俺愛とか大好きなんだよ、君も偉いね！お父さんとお母さんの手伝い？」
マナ「はい！私太貝第一中学校生徒会長の相田マナです！」
剣崎「ごぇ！生徒会長！凄いなー立派だねー」
あゆみ「マナ、もう大丈夫よ、部屋に戻ってていいわ」
マナ「うんわかった、じゃあお客様！ごゆっくりどうぞ！」
橘「暖かいだろ？剣崎」
剣崎「はい、何というか家に帰ってきたみたいな感じがします…そういえば橘さん、今日アンデッドを封印した後、紫の髪の女の子が倒れてて、目覚めたら、王女様って叫びながら泣いていたんですよ」
橘「アンデッドの封印が解かれて2年経つ、襲われたショックで取り乱してしまったのかもしれないな、その子はどうしたんだ？」
剣崎「一人で帰って行きました」
橘「そうか、何もなければいいけどな」

ブーン
剣崎（いやー美味かったなあのオムライス！俺常連になっちゃおうかな？）
ピコンピコン
剣崎「‼？」
剣崎（アンデッドサーチャーが反応してる‼？）
プルル！
ガチャ
剣崎「所長！アンデッドはどこですか⊠」
烏丸「南に２０キロだ、連戦になってしまい申し訳ないが、これも人類の為だ頑張ってくれ剣崎」
剣崎「了解‼？」

ダビィ「真琴！もう夜ダビィ！もう休むビィ！」
真琴「いやよ！私が休んでる間に王女様に何かあるかもしれないわ！」
ダビィ「でも行く当てもないビィ」

真琴「…そうね、探し方を変えなければいけないかもしれないわ…」
真琴「…」
ダビィ「真琴？どうしたんダビィ？」
真琴「トランプ王国も…この世界みたいに平和だったのに…ジコチューの…ジコチュー達のせいで‼？」
ダビィ「真琴…」
イーラ「おい呼んだか？」
真琴「‼？」
ダビィ「お前は‼？」
イーラ「逃げ切れたと思ったみたいだけど、残念だったな、お前がここにきてるのはもうわかってるんだぞ」
真琴「ジコチュー！アン王女は？アン王女は無事なの⊠」
イーラ「そんなの僕が知るか、ベールのやつに聞けよ」
イーラ（たくベールのやつ、この世界で調べ物があるって言ったきり帰ってこないし、何やってるんだか）
イーラ「とにかく、キングジコチュー様を復活させ、この世界もトランプ王国と一緒にしてやる‼？」

真琴「でもキングジコチューは石になったわ、もうあの大量のジコチューは生み出せない！」
イーラ「確かに、あの量はきついな、でも」
イーラ「…」ピシュン！
真琴「どこに消えたの⊠」
ダビィ「真琴！あれ！」
高校生「あー学校だるいなー、もう何もかも壊れないかなー？まぁそんなことり言ってても仕方ないか」
イーラ「壊しちゃえばいいじゃん？」
高校生「え⊠」
イーラ「お前の望み叶えてやる‼？」
高校生「うっ‼？うわぁぁぁぁあ！！」
イーラ「いいねぇ！これなら極上なジコチューができそうだ！」
イーラ「暴れろ！お前の心の闇を解き放て‼？」
ゴリラジコチュー「叩き潰してやる！」
剣崎「よし着いた‼？」
剣崎「なんだあのでかいやつ？あれもアンデッドなのか？」

ジコチュー「ジコチュー!!?」
人々「きゃー!!?」
剣崎「みなさん逃げてください!!?」
剣崎「!!?あの子は!」
真琴「…!」
剣崎「おい!君も逃げ…」
真琴「プリキュア!!?ラブリンク!!?」
ＬＯＶＥ
ソード「…」
剣崎「変身した?」
ソード「勇気の刃キュアソード!!?」
ソード「この世界にもジコチューが…今この世界にいるプリキュアは私だけ、私だけしか戦えないのなら、私がみんなを守る!!?」
イーラ「やってみろよプリキュア!!?こっちは一体ずつしか出せないけど、それはお前も同じ、お前も一人だ!やれジコチュー!!?」
ジコチュー「ジコ」
ソード「煌めけ!ホーリーソード」

ジコチュー「ジコ！」
剣崎「凄い…あの子戦ってる…よし俺も‼?」
ダビィ「あれは！さっきのお兄さんダビィ‼?」
ソード「嘘☒あなた！ここから離れなさい‼?ただでは済まないわよ‼?」
イーラ「なんだ?あいつこっちに近づいてくるぞ?あいつもやっちまえジコチュー‼?」
ジコチュー「壊してやる‼?」
ソード「危ない‼?早く逃げて‼?」
剣崎「大丈夫だよ、俺だって戦える、」シャキンプシュー
剣崎「何故なら俺は、仮面ライダーだからな‼?」ガチャン
ターンアップ
剣崎「はぁぁぁぁぁ」
ブレイド「ウェイ‼?」ジャキン
ジコチュー「ジコ‼?」
ソード「あれは！」
ダビィ「仮面…ライダー?」
ソード（どうしてあの人が仮面ライダーに?）

ブレイド「ここはさっきの封印したカードを使って」
スラッシュ
ブレイド「うぇぇぇぇぇい‼?」
ジコチュー「ジコチューーーーーーー‼?」
ブレイド「よし封印だ」
ヒュンヒュン
ジコチュー「…」
ヒュンヒュン
ブレイド「ヴェ‼?あれおっかしいなー?封印できたはずなのに、絵が変わらないぞ?」
高校生「あれ?俺なにして?」
イーラ「くそ!仮面ライダーがいるなんて聞いてないぞ!」ピシュン‼?
ソード「あなた…」
ブレイド「あ、さっきの女の子?君も戦えるんだね」
ソード「‼?」
ダビィ「変身するところ見られたビィ‼?」
ソード「見られたからにはしょうがないわね」

ダビィ「ちょっソード！」
真琴「あなた、何で仮面ライダーになれるのよ？」
ブレイド「ヴェ？何で仮面ライダーのこと知ってるの？おっかしいなー最近できた技術のはずなんだけどなー、俺ってもしかして有名人だったり…」ガチャン
真琴「ふざけないで！」
剣崎「あ、なんかごめん」
ダビィ「真琴！落ち着くビィ‼？」
剣崎「ヴェ‼？猫が喋った‼？お前もアンデッドか☒」
ダビィ「ち、違うビィ‼？ダビィは怪しいものじゃないビィ‼？」
真琴「私の相棒に手を出さないで！」
剣崎「あ…ごめん」
真琴「答えて、あなたはトランプ王国の生き残りなんでしょ？」
剣崎「トランプ王国？なんだいそれは？」
真琴「惚けないで！あなたがトランプ王国の国民じゃなければ、何故仮面ライダーになれるの？そして何故？ジコチューを浄化できたの？」
剣崎「ジコチュー？それってさっきのアンデッドのことか？」
ダビィ「その様子じゃ、本当に何も知らない見たいビィ」

剣崎「その、何があったか知らないけど、事情があるんだろう？今度こそ話してくれよ？その、トランプ王国の事も」
真琴「ええわかったわ」
ダビィ「でも真琴、今日からどうするビィ？まだ家もないビィ‼？」
真琴「それもそうね…ねぇあなたの家で泊まらせてくれないかしら？」
剣崎「ヴェ‼？君、いいの？」
真琴「ほかに当てがないからしょうがないじゃない」
剣崎「そ、そうだね」
剣崎「じゃあとりあえず、俺は剣崎一真よろしく」
真琴「私はキュアソード、もう一つの名前は真琴よ」
次回ボード壊滅

ボード壊滅

真琴「ジコチュー達は国民は皆ジコチューに変えられて、私とアン王女は一緒に逃げ回っていたわ。そして最後の手段でこの世界に繋ぐ鏡で二人で避難しようとしたわでも、アン王女は追ってきたジコチューから私を逃す為に、途中で分かれて…今に至るわ」

剣崎「そうか…そんなことが…」

真琴「次はあなたの番よ、教えてあなたの言うアンデッドとは何者なのか、そして何故あなたは仮面ライダーに変身できるのか」

剣崎「あぁ、まずアンデッドは、一万年前にいた不死身の怪物で、一年前までは封印されていたんだ、でもある日何者かがその封印を解いたみたいで、アンデッド達は人間を襲っている、そんな中、アンデッドと融合し戦う力と封印する力を備えたライダーシステムを烏丸所長がつくったんだ、俺はその前までは何もしてないただのフリーターだったけど何故か仮面ライダーにスカウトされて今は仮面ライダーとして働いているんだ俺の話はこんな感じかな？ところで真琴ちゃんはなんで仮面ライダーのことを知ってんだ？」

真琴「トランプ王国は私達プリキュアがアン王女をお守りしているのだけれど、アン王女自身も仮面ライダーに変身して戦っていたの、その力でキングジコチューを石にすることが出来たの」
剣崎「不思議だな別の世界にも仮面ライダーっているんだなー」
真琴「もしかしたら仮面ライダーは元々こちらの世界のものかもしれないわね」
剣崎「真琴ちゃん」
真琴「何？」
剣崎「俺もそのジコチューってやつと戦うよ」
真琴「何言ってるのよ？あなたには関係のない話でしょ？」
剣崎「俺は人間を守るためにライダーになったんだ、それにカードを使えば封印だってできる、この世界には俺だけじゃ無くて橘さんっていうすごく頼もしい先輩ライダーもいるんだ一人で戦うことなんてないよ」
真琴「…」
ダビィ「真琴!!闇の鼓動ダビィ！」
真琴「ジコチューね」
剣崎「俺もいくよ！」
プルルル

剣崎「ヴェ?!こんな時にアンデット?·ごめん真琴ちゃん!·アンデットが出た!俺はそっちに向かうよ!·」
真琴「…わかったわ」
剣崎「本当にごめん!」
ぶうううううん
真琴「やっぱり一人で戦うしかないのね…」

ギャレン「ふっ!はっ!」
剣崎「橘さん!お待たせしました!」
ギャレン「遅いぞ剣崎!早く変身しろ!」
剣崎「はい!」シャキンプシュー
剣崎「変身!!」ガチャン
ターンアップ
剣崎「はあぁぁぁぁ!!」
ブレイド「ウェイ!!」

ライオンアンデット「ぐわ!!」
ギャレン「カテゴリー3だ、対した相手でわないが気をつけろ!」
ブレイド「はい!」
スラッシュ
ブレイド「ウェイ!」
ライオン「…」
ブレイド「止められた?!」
ギャレン「よけろ!剣崎!!」
ブレイド「ぐわああ!!」
真琴「あれは一真?なんでここに?それにあれはジコチューじゃない?どうなっているのダビィ?」
ダビィ「わからないビィ、でも闇の鼓動は確かに聞こえるビィ」
真琴「とにかく変身よ、いくわよダビィ」
ダビィ「ダビィ!」
真琴「プリキュア!ラブリンク!」
ＬＯＶＥ
ソード「勇気の刃!キュアソード!」

ソード「はぁぁぁぁぁ!!」
ライオン「グアあああああ」
ブレイド「ヴェ！ソード!!」
ギャレン「何やってんだ！お前!!早く逃げろ！」
ブレイド「大丈夫ですよ橘さん、彼女も戦えます！」
ソード「煌めけ!!ホーリーソード!!」
ライオン「グアぁぁぁぁぁ！」
ソード「嘘？浄化できない?!」
ギャレン「無駄だ、いくら君が戦えようともアンデットは不死身俺たちじゃないと封印はできない」
ライオン「ここは?」
ブレイド　ギャレン「!!」
ライオン「そうか…私はなんてことを…あなたは現代のプリキュアですね」
ソード「え、えぇあなた一体?!」
ライオン「仮面ライダーの皆さんすみませんご迷惑おかけしました、どうぞ私の力をお使いください」
ブレイド「アンデットがカードになっていく！」

ギャレン「おい！までお前にまだ聞きたいことが！」
ヒュンヒュン
ブレイド「…」すちゃ
ギャレン「…」
ソード「どうゆうこと？」
ギャレン「それはこっちのセリフだ、君アンデットに何をしたんだ？」
ソード「…」
ギャレン「まさか烏丸の差金か？答えろ！」
ブレイド「まぁ落ち着いてくださいよ橘さん！彼女は味方ですほら昨日行った紫の髪の子ですよ」ガチャン
ギャレン「何⊠君が？」ガチャン
真琴「…」
橘「詳しく話を聞かせてもらえないか？」

橘「にわかに信じがたいな異世界からきたなんて…」

剣崎「まあ俺達も変身できますし、こう言う戦士がいても不思議じゃないんじゃないですか？」
橘「それもそうだが、君はさっきアンデッドに何をしたんだ？」
真琴「私はジコチューを浄化したつもりだったの、本来ならプシュケーに戻って本来の肉体に戻るはずなんだけど…」
橘「アンデッドがいきなり改心したのは浄化されたからか…剣崎俺たちの目的はアンデッドを封印することだが、どうやらそれだけじゃいけないみたいだな」
剣崎「そうですね橘さん」
橘「それより君、真琴って言ったな」
真琴「はい」
橘「その王女がこの世界に来ているのかわわからないが、探し方を変えないといけないと思う」
剣崎「チラシとか貼ればいいんじゃないですか？」
橘「顔写真もないのに無理だ」
剣崎「じゃあどうするんです？」
ダビィ「真琴！歌ビィ！歌を歌うビィ！」
橘、剣崎「「歌？」」

ダビィ「真琴はトランプ王国では歌姫として名を馳せていたビィ！この世界でも歌を歌って有名になれば」
真琴「王女様が見つかる‼？」
橘「ならテレビ出演が一番早いな、だが所属するには履歴書を書かなければいけない…剣崎」
剣崎「なんですか？」
橘「この子を家に住ませろ」
剣崎「ヴェ‼？む、無理ですよ！」
橘「この子の為だと思え、未成年は保護者の許可が必要だ。」
剣崎「でも俺お父さんって年齢でもないし、そもそも君も大人の人の家に泊まるなんて嫌だろ？」
真琴「かまわないわ」
剣崎「ウソダドンドコドーン‼？」
橘「兄も保護者として扱える、お前はこの子の兄になるんだ」
真琴「じゃあ私はこれから剣崎真琴ってことになるのね、これからよろしく兄さん」

それからしばらく経ち
剣崎「ウェイ!!?」
剣崎「ふー今日で特訓最終日かーこれで俺ももっと強くなったかな?」
プルプル
ガチャ
剣崎「もしもし真琴か?」
真琴「一真特訓お疲れ様」
剣崎「ありがとう、真琴も明日のクローバータワーで会見が最後だろ?頑張れよ」
真琴「ありがとう、そういえば橘さんの体調は大丈夫なの?」
剣崎「それがまだ良くないみたいで、心配だよ」
真琴「なら一真がその分頑張らなくちゃね」
剣崎「あぁ、そのための2ヶ月の特訓だったんだ、明日帰ってきたら料理教えてやるよ」
真琴「それはたのしみだわ、じゃあ私仕事戻るからまた明日ね」ピッ
剣崎「ふー、真琴も今じゃ有名人だよな、今日本で大人気国民的アイドル、顔も可愛ければ実力もあるなんて言われてな、凄いよな、それでもまだ王女様は見つからないし、

いったいどこにいるんだろうな」
ピコンピコン
剣崎「アンデッドサーチャー⊠」
プルプル
ガチャ
剣崎「所長！アンデッドは？」
烏丸「目標地点まで南西２０キロだ、橘な交戦してる。急げ剣崎」
剣崎「了解‼？」カシャプシュー
剣崎「変身‼？」
ターンアップ
ブレイド「待っててください橘さん‼？」

ギャレン「う、うわぁ‼？」
バットアンデッド「シャー‼？」
ギャレン「く、」

ドン‼?
バット「ぐぁあ‼?」
ブレイド「大丈夫ですか⊠橘さん‼?」
ギャレン「あぁ！剣崎」
ブレイド「はぁぁあ‼?ウエイ‼?」ジャキン
バット「ぐぁあ‼?ぐっシャー！」
ギャレン「あいつ逃げたぞ！追うぞ剣崎！」ぶぅウゥウゥウゥん！
ブレイド「はい！」ぶぅぅぅぅぅん！
ギャレン「はっ！」バキュン！
バット「ぐぁぁあ！」
ブレイド「よしここで２ヶ月の成果を見せる時！」
タックル
ブレイド「ウェイ！」
バット「きしゃぁ‼?」ギンっ
ブレイド「うわぁぁぁあ‼?」
ギャレン「まだお前が歯が立つ相手じゃないみたいだな、下がってろ‼?」
ファイア、ドロップ

バーニングスマッシュ
ギャレン「はぁぁぁぁぁぁぁ!!」
バット「ぐぃぁぁぁぁぁぁぁ!」
ギャレン「カテゴリー8か、面白い」
ヒュンヒュン
バット「…」
ヒュンヒュンシャキン
ギャレン「ふー」ガチャン
ブレイド「やりましたね橘さん!」ガチャン
橘「はぁ…剣崎…闇雲に戦えばいいってモンじゃない…はぁ…甘いな…」
剣崎「はい…でもやっぱり一流だよなー橘さんは、俺なんか足元にもおやばねぇや」
橘「今は、真琴ちゃんがこっちにいないから、俺たちがその分頑張らなくちゃいけない…はぁ…こほっ!こほっ!」
剣崎「でも橘さん、最近また体調酷くなってませんか?橘さんも無理しないでくださいね、真琴が忙しい時でも、俺一人で頑張れるようになりますから」
橘「お前は2ヶ月の特訓と単独封印を成し遂げた男だ、カードを増やしていけば、いずれ俺に並ぶ時が来るだろう、その時まで俺は倒れずに待ってるぞ」ぶぅぅぅぅん!

剣崎「橘さん…」
虎太郎「最初はカッコよかったけどねーあとはダメダメだったね」
剣崎「なんだよ、おまえ！」
虎太郎「僕は白井小太郎、化学専門のサイエンスライターを目指してるんだ！化け物と戦う鎧を着たヒーロー仮面ライダーは本当にいたんだね！でもプリキュアはいないみたいだなー、ねぇ！取材させてよ！」
剣崎「取材☒」
虎太郎「いいでしょ☒」
剣崎「仮面ライダーなんて俺は知らないよ」
カチ
虎太郎「ちょっといかないでよ」
カチ
剣崎「勝手にバイクのカギを触るな」カチ
虎太郎「せっかく見つけたのに勿体無いだろ」カチ
剣崎「あーもうお腹痛いからじゃあね‼？」ブウウウウウウウん‼？
虎太郎「あ、ちょっと‼？」

剣崎「うわぁもう変なやつに絡まれたよ、真琴も有名になってからこう言うファンが付き纏ってきたてよくいってるしこう言う気持ちなんだろうな。よしボードの本部に戻ろう」

剣崎（にしても、厳重だよなボードのセキュリティは指紋認証に顔認証カードの認証こんなに登録しなくもいいとおもうけど）

剣崎「お待たせしました、所長」

烏丸「来たか剣崎…」

剣崎「いやーもう最近アンデッドの活動が活発になって疲れますね本当」

烏丸「それに最近はアンデッドサーチャーに引っかかる謎の生物も現れたそだな」

剣崎「そいつらにも、アンデッドにもラウズカードシステムがきくって本当ライダーシステムは凄いですね橘さん！」

橘「…」

剣崎「橘さん？」

烏丸「どうした橘」

橘「素朴な疑問が一つ、俺を助けろと剣崎を急かしたそうですね？そんなに俺の力が信用できませんか？」

烏丸「いや、そんなことはない、君の実力は評価している…だが万が一がある」
剣崎「で、でも凄いですよねやっぱり橘さんは！な、なんかかっこいいと言うかすごいという…か…」
橘「剣崎、お前はなんの為に戦ってる」
剣崎「え、まぁやっぱり妹の為ですし、やっぱりみんなを守れるヒーローみたいだから…」
橘「その純粋さを利用されないようにな」
剣崎「はい…？」

剣崎「橘さん、烏丸所長と何かあったのかな？まぁ早く仲直りしてくれるといいけど、あぁ久しぶりの我が家だ、真琴のためにも料理作らなきゃ」
剣崎「あれ？隣の人引っ越しかな？」
剣崎「あれ？鍵開いてる？」
ガシャン
剣崎「痛った‼？」
大家「あー帰ったかい、あんたの部屋他の人に貸したから、じゃそういうことで」

剣崎「ヴェ！」
剣崎「ちょちょちょ待ってくださいよ大家さん！」
ガシャン！
剣崎「痛った！」
大男「うるせぇぞ‼？」
まコピー（ふらーい！）
剣崎「すいません…」
剣崎（くそ！真琴のＣＤ聴いてるくせに俺は兄だぞ！それよりも‼？）
剣崎「ちょっと待ってくださいよ！大家さん‼？そりゃないでしょ‼？俺達仕事で２ヶ月は戻れないけど必ず帰ってくるって言ったじゃないですか‼？」
大家「いやこっちもね、慈善事業でやってるわけじゃないから、そっちの都合で家賃２ヶ月も払われなかったら干上がっちゃうわけ、まぁあんたの妹さん金もってるだろうし別の物件探しな」
剣崎「じゃあ俺どうするんです⊠妹に料理作る約束しちゃったし、今更‼？」
大家「気の毒だけどね、それはそっちの問題だから…轢くよ‼？」
剣崎「‼？」
大家「…」ぶゥゥゥゥゥん‼？

剣崎「チェッごうつくババァ」
大家「…」きいいいっ！
大家「なんか言った☒」
剣崎「ヴェ！マリモ‼？」
ぶうううううん‼？
剣崎（あぁ‼？真琴とダビィになんて言おう☒）
虎太郎「なんか大変みたいだね」
剣崎「お前…」
虎太郎「でさ！ものは相談なんだけどうちこない⁉？」

剣崎「ここがお前ん家☒広いな‼？」
虎太郎「親代わりだったおじさんさんが僕の為に残してくれたんだ、まぁそのおじさんも去年死んじゃったんだけどね」
剣崎「それにしてもボロい家だな」
虎太郎「だからさ、君と僕で直して使おうよ」

剣崎「おい待て、俺まだ住むって言ってないぞ？」
虎太郎「いく当てないんだろ？僕の調べたところじゃ君は、妹と二人暮らし」
剣崎「お前そんなことまで調べるのかよ‼？」
虎太郎「なぁ頼むよ、仮面ライダーのことを記事にしたいんだよ」
剣崎「あのな、ライダーのことはそんな大っぴらにできることじゃないんだ」
虎太郎「だから答えられる範囲でいいんだよそれ以外は記事にしないから」
剣崎「ほんとかな？」
虎太郎「天気予報によると今日は冷えるらしいよ～ひょっとしたら０か２度か３度、妹も寒いだろうなー」
剣崎「あーもう！わかったよ！ただ取材全てｏｋじゃないし、妹は関係ないから妹には何も聞くなよ‼？」
虎太郎「りょーかい」

菱川家

虎太郎「人類の為に戦う仮面ライダーがね、今日から一緒に住むことになったんだよ

！」
六花「はーもう、小太郎はいつも嘘ばっかり、そんなのいるわけないじゃん」
虎太郎「本当にいるんだって、今度連れてきてあげるよ」
涼子「もう何馬鹿なこと言ってるの？仕事大丈夫なの？出版社辞めちゃったんでしょ？」
虎太郎「書きたい本が見つかったんだ、これからは売ることより書く方だ」
始「ただいま！」
六花「始さん！お帰り！」
虎太郎「あ、それなくなった兄さんのカメラ」
涼子「私が進めたのよ、写真どう？」
始「難しいです」
涼子「誰だって最初はできないわよ、あの人だって私の写真撮る時ピンボケばっかり」
虎太郎「でもその不器用さに惚れて結婚したのでした」
虎太郎「俺便りないからさ、君がこの二人を守ってよ、二人は頭いいし大抵の事は自分でなんとかできるけどね…よろしく頼むよ」
始「俺は、この家気に入ってますから」
虎太郎「なんだあいつ」

六花「無口なのよ、でもいい人よ始さんは、虎太郎も少しはマナや始さんを見習ったら？」
虎太郎「ははっマナちゃんには勝てないよ…」
六花「情けない」
虎太郎「…」牛乳ごくごく
涼子「よく言ったわ六花」なでなで

始「仮面ライダー…？仮面ライダー⊠仮面ライダー‼？う、うわぁあ…⁉？はぁ…はぁ」

真琴「えぇ‼？家から追い出された‼？」
ＤＢ「しかも仮面ライダーってバレた‼？」
剣崎「本当に色々あったんだ、でも真琴がプリキュアって事はバレてないから大丈夫だ…」
ＤＢ「その人プリキュアも調べようとしているのに、そんな人の家に住むって事がお

かしいって言ってるの‼?」
剣崎「ごめんなさい‼?俺、全力で真琴がプリキュアってバレないようにするから、許してくれ‼?」
真琴「とりあえず仕事に戻るから、また後で話しましょう」ピッ
剣崎「本当に、明日なんて謝ろう」
ピコンピコン
剣崎「アンデッドサーチャー⊠これってボードの方だ‼?急がなきゃみんなが‼?」

剣崎「おい!どうしたんだよ‼?何があったんだ!」
研究員「た、橘さんが…」
剣崎「橘さんが⊠橘さんがどうしたんだよ‼?」
研究員「昨日たまたま橘さんと烏丸所長が喧嘩しているところを見て」

橘「あんたがな！あんたが全て悪いんだよ!!？」

烏丸「何をいってる!!？お前に私の苦しみの何がわかる!!？」

橘「ふざけるな!!？もういい!!？とにかく俺の邪魔だけはさせない！邪魔をするなら例えこのボードでも!!？」

烏丸「橘!!？」

剣崎「嘘だ！橘さんがそんなことするわけ！」

橘「俺は橘ギャレンだ力を合わせて一緒に頑張ろう」

ローカストアンデッド「シャー!!？」

剣崎「貴様か‼?貴様がみんなを‼?」カシャプシュー
剣崎「変身‼?」ガチャン
ターンアップ
剣崎「はぁぉぁぁぁぁあ‼?」
ブレイド「ウェイ‼?」
ローカスト「シャー!」
ブレイド「うわぁ!」
ブレイド（だめだ今日の疲れがまだ取れてない、このままじゃ…は!あれは☒）
ギャレン「…」
ブレイド「橘さん☒なぜ見てるんです☒」
ブレイド「うわぁ!」
ブレイド「橘さん!本当に裏切ったんですか☒うわぁ!」
ブレイド「あんたと俺は仲間じゃなかったんでうわぁ!」
ギャレン「…」
ブレイド「何故だ、何故だ‼?何故だ‼?」

次回二人のハート♡

二人のハート♡

生徒「会長!!三村君財布なくしたそうです!!」
生徒2「会長!!矢島さんが酔っちゃったみたいです」
生徒3「会長!!!二階堂くんが喧嘩初めてしちゃいました!!」
マナ「三村君!!財布！おちてたよ！」
三村「会長ありがとう！」
マナ「矢島さん大丈夫?!バスの中ちょっと暑かったよね、ここなら涼しいよ」
矢島「会長ありがとう」
マナ「三村君！喧嘩の原因は何？」
二階堂「こいつらがぶつかってきたんだ！」
他校「ぶつかってきたのはお前らだろ!!」
マナ「ストーーーップ!!貴方達そんな小さなことで喧嘩してたらあの世界一大きいクローバータワーに笑われちゃうよ？」
他校「誰だ！あんた！」

マナ「初めまして！私相田マナ！ほら手と手を繋いだらみんな友達!!」
他校「でへぇ／／／」
運動部達「会長!!今度私達の部活の助っ人お願いします!!」
マナ「うん！いいよ！」
六花「ちょっとマナ！何でもかんでも引き受けないの」
マナ「あはは」
六花「貴方には生徒会の仕事があるでしょ」

真琴「もう!!信じられない!!二ヶ月ぶりに帰れると思ったら家から追い出されるなんて!!」
ＤＢ「まぁまぁ一真も不可抗力だったらしいし、許してあげれば？」
真琴「わかった、でも一緒に料理する約束は守ってもらうわ」
ＤＢ「さて最後の会見に行くとしましょ」
真琴「わかったわ」

マナ「そういえば六花！まこぴー知ってる？」
六花「まこぴー？誰それ？」
マナ「ほら最近有名になった」
六花「あぁ剣崎真琴ね、その子がどうかしたの？」
マナ「今日このクローバータワーに来るらしいんだ!!生まこぴーだよ!!ねぇ六花!!一緒に見に行こうよ!!」
六花「わかったから、後で行きましょ。それよりマナ貴方は愛を振りまきすぎなのよ、もっと自分のことを考えて…」
六花「え!!もういない!!」

マナ「お母さんとはぐれちゃったの？大丈夫お姉ちゃんに任せて!!あぁ泣かないでそうだお姉ちゃんがおまじないを教えてあげる！ほら手のひらにハートを描きながらお願いしてみて、そうすれば…」
母「美智子！」
美智子「ママ！」

マナ「お母さん見つかってよかったね」
美智子「お姉ちゃんありがとう！」
マナ「バイバーい」
マナ「あれ？あんなところに雑貨屋さんがある？こんにちは」
ジョー岡田「やぁこんにちは、素敵な女の子だねこれをあげるよ」
マナ「なんですか？これ」
ジョー岡田「それはきっと君に素敵な出来事を起こしてくれるさ」
マナ「ありがとうございます！大切にします！」

始「ただいま」
涼子「お帰りなさい始さん」
始「あれ六花ちゃんは？」
涼子「今日は学校の行事でクローバータワーに行ってるわよ」
始「そうなんですね」

涼子「始さん本当にありがとう、あの子お父さん大好きだったから、死んだって聞いた時は塞ぎ込んじゃったけど。今は始さんがいてくれたおかげであの子も元気をとりもどしたわ」

始「いえ、俺はただの居候ですから、感謝するのはこっちです。俺部屋戻ってますね」

始「俺はわからない、なぜ俺はあの親子と一緒にいるんだ。俺はあの時戦いにあの子の父親を巻き込んで…」

始「…」

六花「あ、いた！」

マナ「あはは、六花」

六花「もう、言った側から貴方はいつも…」

マナ「面目ない」

六花「まぁそれがマナだからね、そういえば、剣崎真琴見つけたわよ」
マナ「え！どこどこ⊠」
六花「ほらあそこ」
マナ「うわぁ‼？本当だ‼？生まこぴーだ！」たったった！
六花「ちょっと急に走らないでよ‼？」
通行人「まこぴーサインください‼？」
通行人「まこぴーこっち観て‼？」
ＤＢ「ちょっと危ないから押さないで」
真琴（ちょっと人が多すぎるわ）
真琴「…」

マナ「ん、まこぴー何か落とした？」
マナ「これ、さっき私が貰ったのと同じもの？」
マナ「すみませーん！これ！」
ＤＢ「ちょっと貴方困るわプレゼントは…」
マナ「これ、落としました！」

真琴「!!?」
真琴（ラビーズがない！危ないところだったわ）
真琴「ありがとう、助かったわ」
マナ「いいえ！どういたしまして」

タックル
ブレイド「ウェイ!!?」
ローカスト「!!?」
ブレイド（避けられた！）
ローカスト「シャー!!?」ブーン!!?
ブレイド「ぐぁぁぁぁ!!?」
ブレイド（まずいこのままじゃ、壁にぶつけられる、なんとかしないと）
スラッシュ
ブレイド「!!?」
ローカスト「シャぁおぁぁぁ!!?」
ローカスト「…」

ブレイド（バックルが空いた、封印だ）ヒュンヒュン
ローカスト「…」
ブレイド「…」ヒュンヒュンスチャ
ブレイド「はぁ…はぁ…」
ブレイド「!!?」ドンっ!!?
ブレイド「みんなを…守れなかった…」
ピコンピコン
ブレイド「アンデッドサーチャーが反応してる…？どこに？」
ブレイド「!!?」
ブレイド「これってすぐそばじゃ!!?」
ベール「ふんっ!!?」
ブレイド「うやわぁぁぁぁ!!?」
ブレイド「…!!?はぁはぁ」
ベール「ふん…一万年ぶりのブランクの準備運動にと思ったが…こうもあっさり倒せては準備運動にもならない」
ブレイド「お前は誰なんだ！まさかアンデッド☒」
ベール「似たようなものだ、剣崎一真」

ブレイド「何故俺の名前を…答えろ‼?」
ベール「俺に勝てたらな…さぁライダーシステムの力を俺に見せてみろ」
ブレイド「ウェイ‼?」

マナ「うわ‼? 展望台すごい行列だね！六花」
六花「それは、四葉財閥の世界一高い展望台だもの」

管理人「ようこそおいでなさいました、ありす様」
セバスチャン「どうぞありす様」ガチャ
ありす「ごきげんよう皆様」
管理人「ありす様のクローバータワーはご覧の通り大盛況ですよ‼?」

ありす「それは良かったです」ニコッ
管理人「さ、こちらのエレベーターから展望台にってえ！ありす様‼？」
ありす「なんでございましょう？」
管理人「ありす様はここのオーナーなのですよ！列に並ばなくても、エレベーターで行けば…」
ありす「ここに並ぶのがルールなのでしょう？なら私は並びます。それに並んだ分だけ感動がある。マナちゃんならそう言うと思います」ニコッ

六花「結構並んだのに、まだ展望台につかないわね」
マナ「それだけ展望台が凄いって事だよ！」

望美「睦月展望台もうちょっとだね！」
睦月「うん、だけどやっぱりこの行列に並ぶのは辛いな、みんな退いてくれたりしないかな☒」
望美「もう！子供みたいなこと言わないの！」

睦月「ははっそうだね」
イーラ「登っちゃえばいいじゃん⊠」
睦月「え？」
イーラ「お前の望み叶えてやる」パチンッ
睦月「うっ‼？」
望美「睦月⊠どうしたの⊠」

マナ「人が倒れた‼？行かなきゃ‼？」
六花「ちょ、マナ⊠」
マナ「大丈夫ですか⊠」
マナ「え⊠貴方は？」
イーラ「現れろお前の心の闇を解き放て‼？」
カニジコチュー「この景色は俺のものだ‼？」

シャルル「や、闇の鼓動シャル‼？」
ラケル「え！今ケル⊠」

ランス「どうするでランス？まだプリキュアを見つけてないでランス」
シャルル「ここにいることを願って探すしかないシャル‼？」

プルプル
涼子「はい菱川です」
小夜子「もしもし涼子ちゃん☒」
涼子「あら小夜子久しぶりね！どうしたの？」
小夜子「今クローバータワーにいるんだけど、カニの化け物が現れたの！」
涼子「え？クローバータワー☒クローバータワーって今六花がいるのよ‼？」
始「‼？」
始（六花ちゃん‼？）
始「‼？」ダッ‼？

始「…」ブゥゥゥゥゥゥン‼？
始「変身‼？」

チェンジ
カリス「!!?」ブゥぅぅぅん!!?

カニ「どけ!!?ここは俺の景色だ!!?」
ワーキャー
ありす「あら、可愛いカニさん。セバスチャン?あれ飼ってもよろしいかしら?」
セバスチャン「いけません、さぁこちらへ」
カニ「横入り!!?」
マナ「展望台に行くつもり☒」
マナ「確か上には美智子ちゃんが…」
マナ「行かなきゃ!」ダッ!
六花「ちょっとマナ!待って!」ダッ!
シャルル「あの子…もしかして」フワッ!

カニ「横入り‼?」
ワーキャー
美智子「きゃっ！」
母「美智子‼?」
カニ「どけどけ‼?」
マナ「危ない‼?」
カニ「‼?」
マナ「大丈夫？美智子ちゃん？」
美智子「お姉ちゃん…ありがとう」
母「ありがとう！」
マナ「早く美智子ちゃんを連れてってください」
母「貴方は？」
マナ「大丈夫です」ニコッ
カニ「この景色は俺のものだ！」
マナ「違うよ、この景色は誰のものでもないよ、みんなのものよ？自分だけのものにしたいなんてそんなわがまま言っちゃダメ。」
ラケル「あの子！」

ランス「ジコチューを説得してるランス」
シャルル「あの子こそ、プリキュアにふさわしいシャル！」
シャルル「初めましてシャル！私はトランプ王国からやってきたシャルルシャル」
マナ「あ、どうも相田マナです！」
ラケル「なんで適応力ケル！」
シャルル「早速、プリキュアに変身してジコチューと戦って欲しいシャル」
マナ「ジコチューってあのカニさんのこと？わかったやってみる」
マナ「…」
カニ「ジ、ジコ」
マナ「変身!!？」キリッ!!？
カニ「…」
シャルル「…」
ラケル「…」
ランス「…」
マナ「…」
シャルル「え？」
マナ「変！身!!？」キリッ!!？

カニ「なんじゃそりゃ‼?」
マナ「うわぁ‼?」
マナ「あれどうして変身できないよ⊠」
カニ「ジコー‼?」
マナ「きゃあ‼?」
真琴「プリキュアラブリンク‼?」
ＬＯＶＥ
ソード「はぁぁ‼?」
カニ「ジコォ‼?」
ソード「ダビィ！」
ダビィ「ダビィ！」
ソード「煌めけ‼?ホーリーソード‼?」
カニ「ラブラブラーブ??」
マナ「消えちゃった…」
ソード「浄化したのよ」
マナ「あの、助けてくれてありがとう。私相田マナ、貴方は誰?さっきの怪物はなに?」

イーラ「よくもやってくれたなキュアソード！今日はブレイドはいないから余裕だと思ってたのに‼？」
ソード「弱体化した貴方のジコチューくらい一真がいなくても倒せるわ」
イーラ「くっそー！イライラする‼？」
ピシっ‼？
マナ「え？」
ソード「危ない‼？」
ガラガラ
ソード「うっ…」
マナ「あ、ありがとう、でも大丈夫☒」
ソード「問題ないわ…それよりあれは…」
マーモ「あーもう外すんじゃないわよ」
ローズアンデッド「…」
イーラ「あ、マーモ！あとそれってベールが言ってた！」
マーモ「ベールが役に立つから連れて行けって言ってたけど、全然ダメね」
ローズ「‼？」
マーモ「こっちに攻撃してくる始末だし」

イーラ「お前っまさか僕を囮に使ったのか⁉？なんて自己中なやつなんだ⁉？」
イーラ「ベールもベールで今なにしてるかわからないし！」
マーモ「まぁとりあえず今ブレイドがいないならプリキュアを倒しちゃいましょうよ」
イーラ「それもそうだな」
ソード「…っ」
六花「マナ！」
マナ「六花⊠」
ローズ「…⁉？」ブンっ
六花「え？きゃあ⁉？」
六花「…」
ローズ「…」スタスタ
ローズ「…⁉？」ブンッ⁉？
マナ「六花⁉？」ダッ！
ソード「危ない⁉？」
トルネード
ローズ「⁉？」

カリス「…」
ソード「え？仮面ライダー⊠」
イーラ「おいマーモなんで仮面ライダーが‼？」
マーモ「仮面ライダーも確か、ジコチューの鼓動を読むことができたらしいし、見つかってもしょうがなかったかもね」
イーラ「そんな適当な…てうわ‼？」
ソード「よそ見しないでもらえるかしら？」
カリス「この子に…この子に手を出すな‼？」
カリス「はぁ‼？」
ローズ「‼？」ダッ
マナ「六花‼？六花‼？」
六花「…」
マナ「よかった…気絶してるだけか…」
マナ「…」
マナ「私に戦える力があれば…」
マナ「お願いします。私に力を勇気をください」
ピカー

マナ「え？これってお兄さんに貰った!!？」
シャルル「それはラビーズシャル!!？それを使って変身するシャル!!？」
マナ「…わかった!!？」
マナ「プリキュア!!？ラブリンク!!？」
ＬＯＶＥ
キュアハート「漲る愛！キュアハート!!？」
ハート「愛を無くした悲しい薔薇さん!!？このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻してみせる!!？」
次回ボロボロの橘

ボロボロの橘

ボロボロの橘
ハート「漲る愛！キュアハート‼？」
ソード「嘘…！」
カリス「なんだあれは？」
イーラ「おいおい最後の一人じゃなかったのかよ」
マーモ「新人さんかもしれないわね」
イーラ「めんどくせぇ‼？」ブンッ
ハート「おっと！」
ハート（軽い！）
マーモ「ちょっと何手こずってるのよ」
ハート（すごい私の体キュンキュン動く！）ピョン
ハート「…」
ハート「ちょっと…飛びすぎちゃった…？ってわぁぁぁぁぁ」
ハート「おっととと」

イーラ　マーモ「もらった!!?」
ハート「よっ！」
イーラ　マーモ「「痛った！」」
イーラ「ちゃんと見ろよ!!?」
マーモ「そっちこそ!!?」
ハート「凄い！これがプリキュアの力…」
シャルル「ハート！あぶない！」
ハート「え？」
ローズ「…!!?」
カリス「はっ！」
ローズ「…！」
イーラ「お前も、邪魔するな!!?」
カリス「…！」
ローズ「…！」ブンッ
六花「…」
カリス「六花ちゃん！」
ハート「はっ!!?」

ローズ「!!?」パカっ
ハート「!!?」
カリス（バックルが開いた！今なら封印できる！）スルッ
イーラ「なんもやらせないよ！」
カリス「邪魔だ!!?」
シャルル「さぁハート！早く浄化するシャル！」
ハート「浄化…？」
シャルル「ジコチュー達は本当は暴れたくないシャル！だからプリキュアの力で浄化して、プシュケーを闇から解放してあげるシャル！」
ハート「確かに…この薔薇さんから、本当は暴れたくない…そんな言葉が聞こえる…助けたい!!?」
ピカー
ハート「これは？」
シャルル「ラビーズシャル！それをシャルルにセットするシャル！」
ハート「わかった！」
ハート「貴方に届け！マイスイートハート!!?」
ローズ「!!?」

ローズ「…」
ハート「え！カードになっちゃったよ？」
シャルル「おかしいシャル、普通プシュケーだけになるはずシャル」
ヒュンヒュン
カリス「…！」スチャ
カリス（なぜ俺の所に？）
カリス「アンデットは封印した…まだやると言うなら…貴様を殺す」
イーラ「アンデット？あぁもうベールの持ってきたやつなんの役にもたたないな！」
シュン
マーモ「後で問い詰めるしかないわね」シュン
ハート「消えちゃった…」
ハート「あ！」たったった
ハート「初めまして私キュアハート、よろしくお願いします！」
カリス「…」スタスタ
ハート「あ、あれ？」
ソード「…」
カリス「…☒」

ソード「貴方何者なの？味方なの？」
カリス「全てが俺の敵だ…貴様もな」チャキ
ソード「何ですって…！」
ダビィ「ソード、この人から闇の鼓動を感じるビィ‼？」
ソード「てことは、貴方はジコチューそれともアンデット？」グッ！
ソード「何が目的なの！」
カリス「貴様に話す必要はない！」
ソード「‼？」
ハート「ストッッッップ‼？」
カリス、ソード「「‼？」」
ハート「みんなでいっしょに戦った仲間なんだし、もう友達だよ‼？」
ハート「ほら手と手を繋げばみんな友達！」
カリス、ソード「「…」」
カリス「俺は人間と馴れ合うつもりはない」
ハート「そんなこと言って、六花を守ってくれたじゃない」
カリス「‼？」
カリス「…」スタスタ

ハート「あ、行っちゃった…」
ソード「あなた…」
ハート「なーにぃ☒」ニコッ！
ソード「今日のは戦いのうちに入らないわ、ジコチュー達が本気で攻めてきたら、貴方は大切な人を守れるの？」ダッ！
ハート「あ、まってあなたにはまだ聞きたいことが！」
ハート「これどうやって元に戻るの☒」

真琴「…」
ダビィ「真琴？どうして仲間にならないビィ？」
真琴「他の人を巻き込むわけにはいかないからよ」
ダビィ「でも一真は？」
真琴「一真や橘さんは、元々人類の為に戦っていた仮面ライダーよ…でもあの子はさっきまで普通の女の子だったのよ？そんな子を巻き込むわけにはいかないでしょ？」

ダビィ「真琴…」
ダビィ「!!?」
真琴「どうしたのダビィ☒」
ダビィ「強い闇の鼓動を感じるビィ!!?急ぐビィ!」
真琴「わかったわ!」

ブレイド「うわぁぁぁぁ!」
ブレイド（なんだこいつ…めちゃくちゃ強い☒）
ベール「ふぅ…とりあえず今日はこんなものか…次はもっと力を付けておけよ?剣崎一真」
ブレイド「お前!何で俺の名前を!」
ソード「一真!!?」
ブレイド「ソード!」

ソード「!!?」
ソード「お前は!!?」
ベール「おや？いつぞやのプリキュアじゃないか？」
ソード「王女様をどこにやったの⊠」
ベール「俺がお前に言う必要あるか？」
ソード「この!!?」
ベール「ふふっ！」シュン
ソード「あぁ!!?」スカッ
ソード「!!?」ずざぁ!!?
ブレイド「真琴!!?」ガチャン
剣崎「大丈夫か？」
真琴「えぇなんとか…それより」
剣崎「あ…」
真琴「これどう言う状況なの？」
剣崎「…」

真琴「嘘よ…！橘さんが裏切ったなんて…」
剣崎「でも監視カメラの映像を見たら、ギャレンが烏丸所長を襲ってた…」
剣崎「俺はなんの為に戦ってたんだ‼？裏切られるためか…人に裏切られる為に戦ってたのか…もういいよ…」
真琴「一真…貴方言ってたわね…人を守る為にライダーになったって…裏切られたからって何よ！貴方がやらなきゃ犠牲になる人が増えるだけよ！」
剣崎「真琴…そうだよな、俺がやらなきゃ！俺がアンデットからみんなを守らなきゃ…そして…この世界で、真琴の王女様を見つけなきゃな！とりあえず、家に戻るか」
ダビィ「一真、少し待つビィ」
剣崎「なんだよダビィ」
ダビィ「その同居人に剣崎真琴が住むことは伝えてるビィ？」
剣崎「？どう言うことだよ？」
ダビィ「あぁ…どうなっても知らないビィ…」

烏丸「…」

橘「何故だ…何故何も読み取れない‼?あんたまさか妙な仕掛けしてるんじゃないだろうな?本当は意識があって…あんたにどうしても聞きたいことがあるんだよっ‼?」

橘「こほっ‼?…こほっ‼?はぁ…はぁ…」

橘（うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッッ‼?）

橘「‼?」

橘「また…このイメージ…くっ!」ダッ!

マナ「…」

六花「…え?マナ…?」

マナ「あ、六花起きた‼?よかった」

六花「私…一体…」

マナ「まぁその話は置いといて、みんな心配してるし下行こ!」

六花「うん…？」

マナ「はぁあつっかれたー！今日はもう色々なことがありすぎぃ」
六花「左様でございますわね。幸せの王子」
マナ「何それ？」
六花「昔々ある所に、目はサファイア、ボタンはルビィ、体は金箔で色塗られた王子の像が建っていました、王子様はツバメに頼みました『ツバメよ私の体の一部を貧しい人々に分け与えておくれ』と」
マナ「童話？」
六花「そう、マナは昔からその王子様そっくり。他人の幸せばかり考えて自分をすり減らしちゃうんだから」
マナ「別にすり減ってなんかないよ」
六花「まだ話してないことあるでしょ？」
マナ「え☒やっぱり☒」
六花「記憶が曖昧だけど、あんなところで倒れてたら何かあったんでしょ？話して？」

マナ「じゃあ驚かないで聞いてね。実は」
六花「うんうん」
マナ「私プリキュアに変身したの」
六花「…」
六花「はい？」
マナ「トランプ王国から来た妖精が私に不思議な力を与えてくれたのよ、私はその力で変身して、ジコチューな人達と戦ったのよ」
六花「だったら私は白兎の後を追いかけて世界の真実を暴きに行くわ」
マナ「嘘じゃないって」
健太郎「マナおかえり」
あゆみ「おかえりなさい」
マナ「ただいま！」
宗吉「おぉ六花ちゃんもお帰り」
健太郎「おかえりなさい」
六花「ただいまです。マナ続きはまた明日」
マナ「え、ちょっと」
宗吉「今日は晩御飯食べていかなくていいのかい？」

六花「大丈夫です！さようなら！」
マナ「ちょっと六花！」

六花「って事があったのよ…もうマナまで虎太郎みたいなこと言い出して…」
始「…」
六花「始さん？」
始「あぁごめん！マナちゃんもまだそう言うお年頃なのかもしれないね」
涼子「あれ？おかしいわ？」
六花「どうしたの？ママ？」
涼子「今日のクローバータワーの事が新聞に載ってないのよ」
六花「クローバータワー…」
涼子「気になって警察にも連絡してみたのよ、でも調査中ですとだけ言われて切られちゃうの」
始「そう言うものですよ人間って奴らは、理解できないものは認めたくない」
六花「なんだか始さん、人間じゃないみたい」

始「実はモンスターだったりして、ガァ!!?」
六花「全然怖くないよ、始さんがモンスターでも私は平気よ
始「…」
六花「始さん?」
始「あ!ごめん!何でもないよ!熱でもあるのかな?今日は部屋で休んでくるね」
六花「変な始さん…」

始「…」
ガチャ
六花「ねぇ始さん!」
始「何?六花ちゃん?」
六花「始さんにお願いがあるの、始さんカメラ本格的に始めて、パパみたいな写真家になって欲しいの」
始「無理だよ…才能が」
六花「なれるわよ!絶対!」
六花「…」

始「六花ちゃん？」
六花「私パパが死んだって聞いたから本当に悲しかった…私本当にパパが好きだったから…でも始さんを初めて見た時思ったの！この人パパに似てるって」
始「…」
六花「あ、ごめん！急にパパのこと言い出して…お休み」
始「うん、お休み」

虎太郎「あ！剣崎君おかえり‼？」
剣崎「あぁただいま虎太郎、今日から妹も住むからよろしくな」
虎太郎「うん、わかったよ。ところで剣崎君妹ってどんな子？」
剣崎「お前調べてたんじゃ？」
虎太郎「僕が調べたのは家族構成まで、誰かなんてわからないよ」
剣崎「じゃあもうすぐ来るから待ってろよ」
虎太郎「ん？え？何あのいい車⊠」
剣崎「どうしたんだよ虎太郎？」

ガチャン
真琴「ここが新しい家ね」
虎太郎「え、えええええええ‼?まこぴいいいいい‼?」
虎太郎「何でまこぴーがここに?」
剣崎「どうだ真琴、なかなか広い家だろ?」
真琴「前の一真のアパートよりはマシかもね」
剣崎「うるさい、まあじゃあ虎太郎案内してやってくれ…っていつまで座ってるんだよ」
虎太郎「え?、だって、まこぴーが目の前に、え?なんでまこぴーがこの家に住むってへ?」
剣崎「だから、真琴は俺の妹だからだよ」
真琴「初めまして、剣崎真琴です。これからお世話になります」
虎太郎「えええええええええ‼?」
ＤＢ「貴方」
虎太郎「へ?マネージャーさん?」
ＤＢ「一真への取材は許してるけど、真琴の取材はＮＧよ‼?」
虎太郎「は、はい…」

豚のしっぽ亭
マナ「いらっしゃいませ！あ、橘さん！小夜子さんも一緒で！」
橘「今日もオムライスを頼む」
マナ「はい！パパ！橘さんと小夜子さんからオムライスの注文入ったよ！」
健太郎「橘さんいつも、ありがとうございます！」
橘「いえ、この店のオムライスは俺の体を癒してくれる気がするので」
健太郎「そう言ってくれると嬉しいです、よしお二人の為に特別なオムライス作っちゃうぞ！」
橘「…」
橘「小夜子、今日の検査の結果は？」
小夜子「ｃｔスキャン血液検査心電図、どれも異常ないのよね」
橘「何かが、俺の中で起きてるんだ…映像が鮮明になってきてる」
小夜子「ねぇ橘君、人類基盤史研究所って所に勤めてたんでしょ？そこで何か実験とかしてたの？」
橘「…大いなる実験さ…それが人類の為だと信じていた…でも結局は尻拭いだった…

利用されてたんだよ俺は」
小夜子「利用？誰に？ねぇその辺のこと詳しく話してみない？」
橘「それは…」
マナ「お待たせしました！当店自慢のオムライスです！」
小夜子「ありがとう、マナちゃん」
マナ「いえいえ、でわお二人とも、ごゆっくりどうぞ！」
橘「君と食べるここのオムライスは本当に美味しい、俺の体を癒してくれる」
小夜子「橘君が私のところに初めてきて、辛そうだったからここのお店を紹介して…
今じゃこのお店の常連になって」
橘「安心して食事を取れるのがここだけなんだ…」
橘「…」
小夜子「橘君？」
橘「…」ｚｚｚＺ
小夜子「また寝ちゃったの☒」
健太郎「ありやりゃ橘さんまた寝ちゃったのか？」
小夜子「ごめんなさい。車まで運ぶの手伝ってくれませんか？」
健太郎「お安い御用で」

小夜子「マナちゃん、オムライスありがとう！美味しかったよ！」
マナ「ありがとうございます！」
バタンっ！
マナ「はぁ…六花なら信じてくれると思ったのになー」
マナ「て言うか、自分でも信じられないし。信じてもらえないのも当たり前か…」
健太郎「さっきから何を一人でぶつぶつ言ってるんだ？」
マナ「え、いつのまにか戻ってきたの？」
健太郎「そう言う時は食べるに限る！」
マナ「いつ作ったの？」
健太郎「橘さん達のぶんと一緒に作ったのさ！ほら食べてごらん」
マナ「ありがとう！いただきまーす！んーおいしい！最高にキュンキュン来るオムライスだよ‼？」
健太郎「やっといつものマナに戻ったな」
マナ「ふぇ？」
健太郎「何があったのか知らないけど、お前に元気がないとみんな心配になる、パパやママだけじゃない。お爺ちゃんも六花ちゃんも」
マナ「そうだね、パパ！お願いがあるんだけど‼？」

六花「…」
マナ「にゃー」
六花「へ？」
ガラ
六花「どうしたのマナ！こんな時間に！」
マナ「桃饅！パパが蒸してくれたの！」、
六花「待って今行くわ」ガラン
マナ（ちゃんと話そ、そうすれば六花はわかってくれるはず）
???「プリキュアの秘密は話はならぬ…」
マナ「へ？きゃっ！」
六花「お待たせ！ってえ？…マナ？」

剣崎「ふぁあ！おはよう」
虎太郎「おはよう剣崎君！朝ご飯作っといたから食べてね」
剣崎「お、サンキュー」
並ぶうまそうなサンドウィッチ
剣崎「これお前が！」
真琴「ふわぁ…おはよう」
剣崎「おい！真琴見ろよ見ろよ！これ凄い本格的だぞこれ！」
真琴「ちょっと、朝から騒がしいわ…」
剣崎「でもこれめっちゃうまそうだぞ！」
虎太郎「料理が唯一の長所だから、そんなに喜んでくれると嬉しいよ」
真琴「ん？料理？そういえば一真私に料理を教えてくれる約束は？」
剣崎「ヴェ！忘れてた！」
真琴「はぁー…もう」
ピコンピコン
剣崎「アンデッドサーチャーが反応してる⁉？」

ダビィ「真琴…！闇の鼓動ビィ……！」
真琴「一真！」
剣崎「あぁ！」ダッ！
虎太郎「ちょっと待ってよまこぴー！」
真琴「ちょっと話しなさいよ！」
虎太郎「アイドルの君が行く必要ないでしょ☒危ないよ‼？」
真琴「‼？」
ダビィ（しまったビィ…この人は真琴をプリキュアだって知らないビィ）
一真「真琴は家で待ってろ！」ぶゥゥゥゥゥン‼？
虎太郎「あ、待ってよ！取材させてくれるんだろ‼？」ダッ！
ダビィ「よしあの人が外にいるうちに変身するビィ！」
真琴「えぇ！プリキュア‼？ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
ソード「勇気の刃！キュアソード‼？」

剣崎「変身‼?」ガチャン‼?
ターンアップ

橘「見つけたぞ、アンデッド」
ディアーアンデッド「グルルルルル」
橘（俺の身体はどうなってるかわからない…でも戦うことでしかこの身体は治らない気がする）カシャプシュー
橘「変身‼?」
ターンアップ
ギャレン「はっ‼?」
ディアー「グルァ‼?」
ギャレン「うわぁぁぉ‼?」
ぶゥゥゥゥゥゥン
ブレイド「よし着いた」

スタッ
ソード「待たせたわ」
ブレイド「お前どうやって⁉?」
ダビィ「うまく抜け出してきたビィ！」
ソード「それよりも橘さんを助けなきゃ」ダッ
ブレイド「そうだ！橘さん‼?今助けます‼?」ダッ！
ギャレン「来るな‼?」
ソード、ブレイド「「‼?」」
ギャレン「このアンデッドは俺が倒す！うわぁ…‼?はぁ…はぁ…余計な…手出しはするな‼?うわぁ！」
ソード「橘さん…！」
ブレイド「何馬鹿なこと言ってんだ‼?うぇええええい‼?」
ディアー「ぐるわぁ‼?」
ソード「はあぁ‼?」
ディアー「ぐるるらるぁぃぁぃ‼?」
ギャレン「はっ！」
ディアー「‼?」くるっ！

ディアー「グルァ!!?」
ギャレン「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…!!?あぁぁ!あぁぁいぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
ソード「橘さん!」
ソード「煌めけ!ホーリーソード!!?」
ディア「グルルルルルぁ!!?」
ブレイド「ナイスだソード!!?」
キック
ブレイド「はぁぁぁぁぁぁ!!?ウエェェェェイ!!?」
ディアー「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」パカっ
ブレイド「…」スッシュンシュン
ディアー「…」
ヒュンヒュン
ブレイド「…」スチャガチャン
ギャレン「はぁ…はぁ…」ガチャン
橘「ごほっ…!!?ごほっ…!!?うっ!!?」
真琴「大丈夫ですか⊠橘さん!!?」

剣崎「待て真琴」
真琴「一真…？」
剣崎「俺はあんたに話があったんだ…あんたなのか？本当にボードを襲ったのは‼？」
真琴「…！」
剣崎「そしてあんたなんだろ‼？烏丸所長を誘拐したのは‼？」
橘「なんとでもお前ばいい…‼？こほっ…！こほっ…！俺は言い訳はしない」
真琴「嘘…‼？本当に橘さんが…」
剣崎「返せよ！烏丸所長を！」
橘「烏丸…あんな悪人なぜ庇う‼？」
剣崎「悪人はあんただろ‼？あんたが許せないからだ！あんたなんだろ！アンデッドの封印を解いたのは‼？」
橘「…解いた？俺が封印を解いた…？ははっ！ふふふ！」
剣崎「何がおかしい☒」
橘「封印を解いたのはな…俺じゃない…烏丸達だ…」
剣崎「‼？」
真琴「？」

剣崎「嘘だ！そんな話信じられるか！」
橘「奴らは大慌てでライダーシステムを作った、封印を解いたアンデッドを封印する為にな…結局俺とお前は…奴らの尻拭いをされていただけなんだよ‼?こほっ…！こほっ…！」
剣崎「証拠は…何を証拠にそんなこと‼?」
橘「証拠は俺の身体だ…はぁ…はぁ…急遽作ったライダーシステムのせいで…はぁ…俺の身体はボロボロだっ‼?ごほっ…‼?ごほっ…‼?本来なら今のような無様な戦い方はしない‼?」
剣崎「そんな…」
橘「そしていつかお前の身体もそうなる」
真琴「‼?」
橘「その時を覚悟しておくんだな…」
剣崎「…」
剣崎「そんな…俺の身体が…ボロボロに…」
剣崎「嘘だ…嘘だそんなことぉっ‼?」

次回二人のダイヤ◊

二人のダイヤ◊

二人のダイヤ◊
マナ「いったた…貴方何者なの？」
???「ふっふっふ」
シャルル、ラケル、ランス「じゃーん‼？」
マナ「増えた」
ラケル「僕はラケル！」
ランス「ランスでランス～」
シャルル「みんなトランプ王国からきた妖精シャル」
マナ「初めまして相田マナです。そうだ！これから六花にプリキュアのこと説明するから貴方達も手伝って」
ラケル「それはできない相談ケル」
マナ「なんで？」
シャルル「プリキュアのことは誰にも言っちゃいけない決まりシャル」
マナ「どうして？」

シャルル「ジコチューは人の心をどんどん闇に染めようとしてるシャル」
ランス「それを防ぐことができるのは…で…伝説の…？」
ラケル「戦士」
ランス「そう！伝説の戦士プリキュアだけでランス」
シャルル「マナはその一人シャル！」
マナ「それはわかったけど、どうしていっちゃいけないの？」
ラケル「ジコチューはこちらの世界にも魔の手を伸ばしてきてるケル」
シャルル「秘密を話せば、その人も戦いに巻き込むことになってしまうシャルよ」
マナ「!!？」
マナ「わかった！もう言わない！」
シャルル「よかったシャル！」
マナ「もう六花をあんな危ない目に遭わせるわけにはいかないもの」

虎太郎「本当なの？ライダーシステムの影響で身体がボロボロになるって？」

剣崎「わからない…でも橘さんは確かにそう言ってた。実際あんな橘さん初めて見たし…」
真琴「一真…」
剣崎「なんだよ…？」
真琴「あなた…もうライダーやめなさい」
剣崎「え？」
虎太郎「え！」
剣崎「どう言うことだよ真琴！俺が戦わないと誰がアンデッドと戦うんだよ！」
真琴「でも貴方が戦い続けたら、身体がボロボロになるのよ⊠」
虎太郎「気持ちはわかるけど剣崎君がいなくなったら、仮面ライダーはもうこの世界にいなくなっちゃうし。それじゃあ本末転倒なんじゃ」
真琴「一真と橘さんとは別に仮面ライダーはもう一人いる」
一真「なんだって！」
真琴「それに…」
真琴「プリキュアがいるわ」
剣崎「!!？」
ダビィ「!!？」

真琴「私は橘さんを探す…そしてライダーをやめさせる」ダッ！
剣崎「おい待て！真琴‼？」ダッ！
虎太郎「あ！剣崎君‼？」
剣崎「真琴！」
ソード「！」ビュン！
剣崎（飛んで行った…！）
虎太郎「あれ？まこぴーは？」
剣崎「…」
虎太郎「剣崎君？」
剣崎（真琴、そんなことすればまだお前は一人に…）

マナ「行ってきまーす！」たったっ！
マナ「うげぇ‼？」
六花「マナおはよう」
マナ「お、おはよっう…」髪の毛くるくる

六花「…？」
マナ「…」
じいちゃん「あの二人喧嘩でもしたのかい？」
健太郎「さぁ？」
六花「昨夜は差し入れありがとうね」
マナ「ああわあ、ど、どうだった？」
六花「美味しかったよ！二つは食べきれなかったけど」
ハートぐっさー
マナ（あう、心が痛い…！）
六花「マナ」
マナ「な、何⊠」
六花「何を抱えてるか知らないけど、今はまだ聞かない。言えるようになったらちゃんと教えてね！私待ってるから」
ハートぐさぐさぐさぐさ
マナ（あ”う”う”こ、心が…）
マナ「ぷへぇ！」ダッ！
六花「？」

マナ「うん！」
マナ「やっぱり話す‼？」
シャルル「えええええ！」
マナ「六花に隠し事なんてできない！全部話す‼？」
シャルル「そ、そそそそんな‼？」
マナ「六花ー！」
シャルル「お、おとお友達を戦いに巻き込んでもいいシャルか…☒」
マナ「うう…」
六花「☒」

一般生徒「やっべー遅刻遅刻‼？」
信号「赤だ止まれ」
一般生徒「ああ！また引っかかっちまった！信号が好き勝手変えられたら、遅刻せずに済むのにな…いやいや早起きしなかった俺が悪いんだ…」
イーラ「変えちゃいなよ信号」

一般生徒「誰だ？」
イーラ「お前の希叶えてみろよ」パチンッ！
一般生徒「う、うわぁぁぁ！」
イーラ「暴れろ！お前の心の闇を解き放て‼？」
信号ジコチュー「ジコチュー‼？」
ジコチュー「俺様の道を横切るな！ストップ！」

シャルル「相手のためを思ってつく嘘だってあるシャル！」
マナ「でも…」
きゃー‼？
マナ「あれは☒」
マナ「あの信号さんのレーザーで周りの人達が止められてる☒」
生徒たち「「「会長‼？」」」」
六花「マナ！」
シャルル「ジコチューシャル」
マナ「六花！みんなを安全な所へ、私がなんとかする」

六花「マナは☒」
マナ「え？」
六花「マナはどうするの？」
マナ「あの信号を止める！」
六花「この幸せの王子‼？」
マナ「え？」
六花「広場に立っている銅像には困ってる人達に金箔を運ぶツバメが必要なのよ☒私は貴方のツバメにはなれない☒」
マナ「‼？」
マナ「うん‼？」
マナ「手伝って‼？」
六花「うん！」
ジコチュー「この道は俺様のものだ」
ジコチュー「ん？」
マナ、六花「せーのっ！」
ジコチュー「お、前からボールが！ジコー」
マナ「みんな今のうちに逃げて！」

ジコチュー「俺様の道にボールなんて転がしたやつは誰だ？」
マナ「はい！私です！」
六花「マナ☒」
ジコチュー「許さん！」
シャルル「まさか…お友達の前で変身するつもりシャル…？」
マナ「変身する！」
シャルル「ぇぇぇ！」
マナ「今までだって散々巻き込んできたんだもん、そうだよね？六花」
六花「マナ？」
シャルル「どうなっても知らないシャル」
マナ「プリキュア‼？ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
マナ「漲る愛！キュアハート！」
マナ「愛を無くした悲しい信号機さん！貴方のドキドキ取り戻して見せる！」
六花「ぇぇぇぇぇ！」
ジコチュー「ジコチュー！」
ハート「ぇぇぇいっ‼？」ドンッ！

ジコチュー「ジコッ！」
六花（…）
六花（いくら友達だけらって信じられるわけないじゃない！あんたってほんとありえないんだから！）
ジコチュー「この道は俺様のものだ！」ビーッ！
ハート「きゃあっ‼？」ピタっ
六花「マナ！」
ハート（う、動けない‼？）
ジコチュー「踏み潰してやる」
六花「起きてマナ！」
ハート「…」
六花「起きてマナ！ん？あれは？ボタン⊠あれを押せば！」ポチッ
ジコチュー「き、貴様‼？」ビー！
六花「…」ピタッ！
ジコチュー「急がなくてわ‼？」
ハート（お願い…）
ジコチュー「潰れろ！」

六花（お願い‼?早く動いて‼?）
橘「変身‼?」
ターンアップ
バレット、ファイヤ
ファイアバレット
ギャレン「はっ！」
ジコチュー「ジコー‼?」
ハート「動いた！」
ギャレン「早くやつを浄化しろ！」
ハート「誰かわからないけど、ありがとう！」
ハート「貴方に届け！マイスイートハート‼?」
ジコチュー「ラブラブラーブ」
ギャレン「よし！」
ハート「あの助けてくれてありがとう！」
ギャレン「礼には及ばない。ただ一つお願いだカードを俺にくれないか?」
ハート「カードって?あ！そうだ確かジコチューを浄化すればカードになるんだ！いいですよ！」

ギャレン「すまない助かる」
ハート「えーと？あれカードじゃない？何あのハート？」
ギャレン「おい！どうなってるんだ！」
シャルル「あ、あれがプシュケーシャル！本来ジコチューはプシュケーからできたものシャル！だから浄化すればプシュケーだけになって持ち主のところに戻るシャル！」
ギャレン「お前、俺を騙したのか？」
ハート「そんなことしてないよ！私も驚いてて…」
ギャレン「黙れ！プリキュアがアンデッドを浄化したらカードに戻る事はわかってるんだ！あんたまさか妙な細工したんじゃないんだろうな」チャキ
ハート「ちょっちょっと落ち着いて！」
ソード「煌めけ！ホーリーソード」
ギャレン「ぐわぁ！」
ハート「あ、ソード!!？」
ソード「何をしているのギャレン！」
ギャレン「これは、俺の問題だお前には関係ない」
ソード「関係あるわ!!？」
ギャレン「！」

ソード「だって共に戦った仲間ですもの」
ギャレン「…」
ギャレン「場所を変えるぞ」ぶうううぅん！
ソード「…」ダッ！
ハート「行っちゃった…」
六花「マナ！大丈夫だった☒」
マナ「あ、うん平気それにしてもどうして今回はカードにならなかったんだろう？」

六花「…」
マナ「お待たせ！何かわかった？」
六花「細かいところはわからないけど、このラビーズは地球の物質ではないと言うことよ」
マナ「なんですと！」
六花「これどこで手に入れたの？」

マナ「このハートのラビーズは変身してる時に光の中から生まれたの、でこっちの金色の方はクローバーでみつけたお兄さんからもらったんだ」
六花「貴方達何か知ってる？」
シャルル「さぁ？」
ラケル「僕達は生まれてすぐこっちに来たから何も知らないケル」
マナ「どうりで色々とあやふやだったわけね」
ラケル「失礼な！」
シャルル「これでも精一杯頑張ってるシャルよ！」
マナ「ごめんごめん」
六花「そうね、貴方達が協力してくれたおかげでいろんなことがわかったわ」
マナ「たとえば？」
六花「このキュアラビーズはプリキュアの力の源になってるみたいなの。おそらくラビーズの数だけプリキュアはいろいろな能力を発揮することができるわ」
マナ「へぇー凄いんだねキュアラビーズって」
ガラっ
先生「ん？なんだお前たちまだ残ってたのか」
ランス「ｚｚＺ」

マナ、六花「‼?」サッ
マナ「あぁーすいません！」
マナ「どうしよう…！六花…！」
六花「とりあえずランスを隠して…！」
マナ「わかった…！」
六花「どうしても今日中に調べておきたいことがあったので‼?」
マナ「うんうん！」
先生「先生もう変えるからな。３分以内に片付けないと鍵閉めちゃうぞ」
六花「大変‼?」
マナ「ちょっと待って！」
ランス「ｚｚＺ」

六花「それよりも、そのマナにラビーズをくれたお兄さんが気になるわね。一度調べてみる必要が…」
マナ「♡♡♡」

六花「マナ？これ剣崎真琴のポスター？」
マナ「ねぇねぇ知ってる？今度四葉スタジアムで開催されるまこぴーのコンサート六万枚のチケットがたった３分で売り切れたらしいよ！あー私も行きたかったなー！」
六花「もうマナったら浮かれてる場合じゃないでしょ？」
マナ「あそうだった…よしお腹がすいたしうちでご飯でも食べながら対策を練るとしますか！」
六花「異議なし」

豚のしっぽ亭
健太郎「どうぞ召し上がれ」
マナ、六花「「いただきます！」」
六花「んー！ほっぺた落ちそう‼？やっぱりマナのお父さんの料理は最高です！」
健太郎「それは良かった」
マナ「さっすが私のお父さんだよ！」
宗吉「ふん！わしに比べたら半人前だかな」

健太郎「なら勝負してみますか？お父さん？」
宗吉「望むところだ」
健太郎「いつまでも昔の私と思ってたら大間違いですよ」
宗吉「なんのまだまだ！」
あゆみ「はいはい！そこまでお客さんが待ってるから後にしてね」
六花「すみませんいつもご馳走になってばかりで申し訳ないです」
マナ「気にする事ないって、ご近所どうし持ちつ持たれつですよー」
あゆみ「ゆっくりしてってね」
健太郎「おかわりまだいっぱいあるよ」
六花「ありがとうございます」

六花「ご馳走様でした」
マナ「ご馳走させました」
シャルル「二人は本当に仲良しシャルね」
ラケル「いっそのこと六花もプリキュアになったらどうケル？」

六花「はい？」
ラケル「あ、あの…六花は頭もいいし優しいし僕のパートナーになってくれたら嬉しいなーなんて」
マナ「いいねそれ！六花が一緒に戦ってくれたら１００人力だよ！」
六花「わ、私が？」
シャルル「名前は？」
マナ「そうねぇ私がハートだから…キュアダイヤっていうのはどう？」
ラケル「うんうん」
六花「ちょっと待ってよ！」
マナ「ん？」
六花「私マナみたいにスポーツ万能って訳じゃないし…人の前に出るのも苦手だし…あんなひらひらの服私には似合わないし…そもそもプリキュアってなりますって言って慣れるものじゃないでしょ？」
マナ「大丈夫、私がなれたんだから六花だってなれるよ」
六花「マナは正義感が人一倍強いし、みんなから必要とされている存在だもの…プリキュアになったのも…なんとなくわかるんだ…けど私はダメ自分のことで精一杯だもの」

マナ「そんなことないよ六花にはいつも支えてもらってるよ？」
六花「ありがとう」
マナ「六花」
六花「心配しないで、これまで通りちゃんとバックアップはするからさ。明日はマナにラビーズをくれたって言うお兄さんを探しに行こう！おやすみ！」
マナ「んー、逃げられたか」

六花「…」
六花「パパは最後何を考えてたのかな？」
六花「小さい頃から続いていたパパとの手紙、全部残ってる」
六花「だってパパとの思い出は全部大事なものだもの…いつだって私はパパを忘れた事はないわ」
六花「…」
六花「パパ、私は大丈夫よ。私にはマナがいて始さんもいる。いつだってこの二人が

いるから私は生きていけるんだよ」
パラパラ
六花「⁉?」
六花「え?何この粉?」
始「ただいま!」
六花「始さん⊠」
始「‼?」
ボッ!
六花「‼?」
六花「パパとの手紙が燃えてる⁉?」
六花「だっだめ‼?」
始「危ない六花ちゃん‼?触っちゃだめだ‼?」
六花「あ…いや…いやっ!」
始「六花ちゃん!落ち着いて‼?」
六花「うぐ…ぐすっ…こんなのって…どうしてこんな事が…」
始「…」
始「‼?」ブチっ!

涼子「ただいまって六花!?どうしたの?」
六花「ママ…」
始「…!」

プルプル

虎太郎「あーもしもし白井です…姉さん?どうしたの?え?手紙が燃えた?」
剣崎「何!」

虎太郎「これは?」
剣崎「手紙だけが全て燃えて、家自体は綺麗だ、どうなってるんだ?」

虎太郎「何か他に異常は？」
六花「…」
涼子「空から銀の粉みたいなのが落ちてきたみたいなの」
六花「…」
始（六花ちゃん…）
始「なんとかします俺が」
剣崎「なんとかって理由がわかってるのかよ君？」
始「いや…」
剣崎「じゃあ解決のしようがないだろ☒あんまり安請け合いするなよ！気休めにもならない…」
始「君達の様にただ驚いてるだけよりわましだろ！」
剣崎「何ぃ‼？」
虎太郎「よせよ喧嘩は、僕達が揉めたってしょうがないだろ？」
始「…」ペコッ
始「…」スタスタ
剣崎「なんだあいつ？」
涼子「この頃変な事ばかり起きてる…変な怪物にこの子が襲われたのもそうだし…こ

れも…」

虎太郎「姉さん」

始（どこだ⊠どこにいる⊠隠れても無駄だ、絶対貴様は俺が封印する）

イーラ「んんん！」

マーモ「荒れてるのね」

イーラ「あったりまえだろ‼？僕のジコチューを2回も潰されたんだ！」

ベール「熱くなってもゲームは勝てないぞ？イーラ」

イーラ「あ！ベール‼？」

ベール「お前達、たかが小娘一人に何を手こずってるんだ？」

イーラ「一人じゃない‼？」

マーモ「増えたのよ、プリキュアは二人それにあの王女が変身してた仮面ライダーもいたわ」
ベール「そいつは厄介だな手を貸そうか？」
イーラ「そういえば！お前が前よこしたジコチュー！全く役に立たなかったぞ！」
ベール「それはお前らの実力が甘かったからじゃないのか？」
イーラ「うるさい！相手が何人だろうと僕がまとめて始末してやる！」

ピンポーン
六花「マナだ…」
涼子「六花今日は休んでもいいのよ？マナちゃんに行ってあげようか？」
六花「いや大丈夫…むしろマナに合わない方がおかしくなりそう…」
涼子「六花…」
ガチャ
マナ「六花おはよう！」
六花「おはようマナ！」
いってきまーす

剣崎「あの子大丈夫か？」

橘「入れ」
真琴「…」
ダビィ「真琴！罠かもしれないビィ入っちゃだめビィ！」
橘「罠なんて仕掛けたとしても、プリキュアの力なら難なく抜け出せるだろ？」
真琴「その通りよ、それに貴方には話しておきたい事があるもの」
橘「なんだ？」
真琴「仮面ライダーをやめなさい」
橘「それは無理な相談だ…」
てくてく
烏丸「…」
真琴「この人って…確か防犯カメラに写ってた」

橘「烏丸だ、剣崎から名前はよく聞くだろ？」
真琴「…」サッ
橘「触るな！生命維持装置を付けて辛うじて生きてる状態だ…」
真琴「どうしてこんなことを？」
橘「俺じゃない、この男が一人で戦いに行くと言い出したから緊急避難の意味でこの行動をとった…俺はアンデッドからこの男を守りながらここまで来たんだ…困るんだよこの男に死なれちゃ…お前がライダーをやめろと言うのは俺の身体を気遣ってのことだろ？だが俺の身体は手遅れだ…治し方もわからないだが戦うことでしか治らない気がする…それをわかってくれ」
真琴「橘さん…」
橘「俺も昔は剣崎のように夢を持っていたんだ…人類を守ると言うな…でも俺の身体は…」
ボッ！
橘「何⊠」
真琴「どう言うこといきなり体が燃え始めて！」
橘「おい！どう言う事だよ！待て逝くな烏丸！」
真琴「ダビィ変身よ！」

橘「‼?」
橘「待て！」
橘「トリックだ」
真琴「トリック？」
橘「人体が燃えている割には煙があまりにも出ていない」
橘「それにみろ」
真琴「さっきの人が消えた⊠」
橘「烏丸自体はバーチャルの映像だ…そしてこの光は…マグネシウムだ」
真琴「マグネシウム？」
橘「つまりいかにも燃え尽くして消えたように見せたんだ…どこまでも薄汚ねぇ野郎だ！」
橘「お前の聞きたい話は聞けたか？」
真琴「え、ええ」
橘「俺は烏丸を探し続ける、そしてこの身体が治るまで俺は戦い続けるからな…剣崎にもそう伝えておけ」ガチャバタン
真琴「…」
真琴「一真…」

シャルル「そういえばラビーズをくれたお兄さんの場所はわかってるんでシャルか？」
マナ「え？わかんないよ」
ラケル「どこ探すつもりケル？」
マナ「まぁ歩いてれば自然に見つかるでしょ」
どんっ
マナ「痛った」
ジョー岡田「ごめんね、怪我はないかい？」
マナ「あー、どうもすいません…あ！こんにちは！」
六花「知り合い？」
マナ「この人が私にラビーズをくれたお兄さんだよ！」
ジョー岡田「また会えたねベイビー。嬉しいよ開店初日にまた君と会える事ができた

なんて、これも運命ってやつかな」
マナ「開店って？」
ジョー岡田「あれが僕の店だよ」
マナ「おー！可愛い‼？」
ジョー岡田「よかったら少し覗いていかないかい？」
マナ「是非！」
六花「ちょっと待って！」
マナ「何よ？」
六花「おかしいでしょどう考えても、偶然この町に店を開くなんてあり得ないでしょ？もしかしたらマナを付け回してるのかも」
マナ「まさか⊠」
ジョー岡田「どうしたんだい？」
六花「貴方一体何者なんですか⊠」
マナ「ちょ…！六花⊠」
六花「貴方がくれたこのラビーズの力でマナは変身したんですよ？知らないなんて言わせない」
ジョー岡田「…」

六花「なんとかいったらどうなんですか？」
ジョー岡田「フフフっ！」
六花「何がおかしいんですか？」
ジョー岡田「あーごめんごめんそうか変身か
、女性はちょっとしたきっかけで変身すると言うものね」
六花「例え話じゃなくて」
マナ「私は本当に変身しちゃったんですけど」
ジョー岡田「僕のラビーズの力で君は新しい自分を発見したと言うのだね、そこまで喜んで貰えたのなら僕も嬉しいよありがとう」
六花「やめてください」
ジョー岡田「んーそうだ商品を整理してたらこんなものが出てきたんだ」
マナ「ラビーズ！」
ジョー岡田「君にあげるよ」
六花「わ、私？」
ジョー岡田「開店記念の特別サービス」
六花「あの、これいただけません」
マナ「六花？」

六花「どこの誰かもわからない人から意味もなく物をいただけませんし、何より私は貴方の思い通りにはなりません」
ジョー岡田「君は何か思い違いをしているようだ」
六花「思い違い？」
ジョー岡田「僕が君を選んだわけじゃない、このキュアラビーズが君を選んだんだ。その力をどう使うかは君自身じゃないのかい？」
六花「…」
ジョー岡田「じゃあね」
六花「…」
マナ「六花…？」

小夜子「あれ？最後のパズルのピースがない？どこに置いたのかな？」
橘「…」
小夜子「あ、橘君」

橘「そのパズルのピースは俺が飲み込んだ」
小夜子「え⊠」
橘「怖くてさ…完成させちまうのが…完成されたら…終わりのような」
小夜子「橘君」
橘「悪いがまたここで寝かせてくれ君のそばが一番気が休まる」
橘「ｚｚＺ」
小夜子「心配症ね、大丈夫よ完成させないまた最初からやる」

始「どこだ？どこにいるんだ…？出てこい‼？」

六花「…」
マナ「六花？」
六花「…」
マナ「六花てば！」
六花「あ、…ごめんマナなんだった？」
マナ「何かあったの？」
六花「‼？」
マナ「なんか今日の六花凄く辛そうだったから…」
六花「やっぱりマナには隠せないか…実はね…」

マナ「そうか、お父さんとの手紙が…」
六花「私の…大事な思い出だったんだ…」ポロポロ
マナ「そうだよね…六花はお父さんのこと大好きだったもんね」ギュッ！
六花「マナ…うっ…マナ‼？うわあぁあん‼？」
シャルル「闇の鼓動シャル！」
マナ「嘘！」

ラケル「ジコチューケル！」

モスアンデッド「シャア！」
ブゥゥゥゥゥゥん‼？
始「見つけたぞ！」
始「変身‼？」
チェンジ
カリス「お前だけは…お前だけは許さない！はっ！」
マナ「またあの人だ！」
シャルル「とにかく変身シャル」
マナ「わかった！プリキュア！ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
ハート「漲る愛！キュアハート」

ハート「愛を無くした悲しい虫さん！このキュアハートが貴方のドキドキ取り戻してみせる」
ハート「はぁっ！」
モス「シャア！」パラパラ
六花（あれって…）
ハート「熱っ！」
カリス「そいつの銀の粉には燃焼効果がある気をつけろ」
六花「てことはやっぱり…‼？」プルプル
ラケル「六花？」
六花「よくも私のパパとの手紙を‼？」
六花「うわぁぁぁぁぁぁ‼？」
カリス「な！六花ちゃん？」
六花「ラケル！プリキュアに変身させて」
ラケル「わ、わかったケル！」
六花「プリキュア！ラブリンク‼？」
六花「…」
ラケル「ケル…？」

マナ「どう言うこと…？きゃあっ！」
六花「ハート！」
モス「…」てくてく
カリス「その子に手を出すな！」
イーラ「見つけたぞ！仮面ライダー！」
カリス「うわっ‼？」
イーラ「まずは一人ずつ僕が消してやる」
カリス「次邪魔をしたなら殺すと言ったはずだ‼？」
六花「どうして…変身が…」
ラケル「きっと愛ケル」
六花「愛？」
ラケル「プリキュアは愛の力によって変身する戦士自分の愛と融合して力を発揮できるケル…だからラブリンクなんだケル」
六花「そんな…」
ハート「六花危ない‼？」
モス「シャア！」
ハート「ぐっ！」

六花「ハート！」
モス「…」てくてく
カリス「六花ちゃん！」
イーラ「よそ見をするな！」
カリス「グワッ‼？」
六花「…」ペタンッ
六花「…」
六花（なんでだろう、凄く昔の事を思い出す）
六花（マナと初めて会った記憶、私マナと会ってから毎日が楽しかった…それに始さんの記憶、パパが居なくなって現れた人、でもこの人の優しさのおかげで私は寂しくなかった）
六花「そうだ…私は…ずっと2人から助けられてたんだ…私は…私を愛してくれたその人達を守る為に戦いたい‼？」
ピカー
イーラ「な、なんだ？」
ハート「この光は！」
カリス「‼？」

ラケル「六花！変身ケル‼？」
六花「うん！」
六花「プリキュア！ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
ダイヤモンド「英知の光！キュアダイヤモンド‼？」
ダイヤモンド「人の思いを踏み躙るなんて許されない！このキュアダイヤモンドが貴方の頭を冷やしてあげる」
カリス（六花ちゃんがプリキュアに‼？）
ハート「ダイヤモンド！」
イーラ「く、まだ増えるのかよ？」
トルネード
イーラ「うわぁつ‼？」
カリス「よそ見をするなと言ったのお前だろ？」
モス「シャア！」
ダイヤモンド「私はマナと一緒ならどこまででも飛べる‼？」
ピカー
ダイヤモンド「煌めきなさい！トゥインクルダイヤモンド‼？」

モス「!!?」
イーラ「足が凍った?」
ダイヤモンド「今よ!ハート!!?」
ハート「うん!貴方に届け!マイスイートハート!!?」
モス「…」
ヒュンヒュン
カリス「…」スチャ
カリス「思いの強さ…人の思いはどこまでも強くなれる…か」スタスタ
ダイヤモンド「キュアハート!」
ハート「ん?」
ダイヤモンド「」ニコッb
ハート「!」
ハート「」ニコッd
マナ「よかった、六花なら絶対に変身できるって信じてたんだ」
六花「これでよかったんだよね」
ラケル「六花!これからよろしくケル」
シャルル「ラケルのパートナーも見つかったし後はランスだけシャルね」

マナ「そういえばランスは？」
シャルル「え？」
六花「そういえば」
ラケル「どこ行ったケル？」
六花「ていうかいつからいないわけ？」
マナ「いつだっけ？昨日の放課後までは確か一緒だった気がするけど」
マナ「…」
シャルル「…」
六花「…」
ラケル「…」
マナ、シャルル、六花、ラケル「「「「大変だ‼？ランスがいない‼？」」」」
わーきゃーどこいったのーうそだどんどこどーん
ありす「お困りのようですわね」
マナ、六花「「ありす‼？」」
ありす「ご機嫌ようマナちゃん六花ちゃん」ニコッ
シャルル「誰シャル？」

次回恐怖心俺の心に恐怖心

目覚めるクローバー♧

目覚めるクローバー♧

橘「う…うぅ…」
橘（うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！）
橘「はっ！」
橘「はぁ…はぁ…」キョロキョロ
ガチャン
小夜子「また見たのあの夢？」
橘「あぁ…」
小夜子「心配しないで、医学的な検知からは何も問題ないって」
橘「君に何がわかる…」
小夜子「え？」
橘「何がわかるんだよ‼？」
小夜子「…！」

橘「ごめん…どうかしてるな…今日は帰る」
ガチャ
小夜子「橘君…」

橘「俺は…だめな人間だ…何も悪くない小夜子にあたってしまうなんて…」
ブーン
橘（ん？妙だな…あの車俺をみて止まらなかったか？
ありす「ようやく見つけましたわ、橘朔也さん」ニコッ
橘「君只者じゃないな…何者だ」
ありす「初めまして私は四葉ありすと申します」
橘「四葉…まさか四葉財閥の御令嬢⊠い、一体俺になんのようだ？」
ありす「単刀直入に申し上げますと、貴方の身体を直して差し上げますわ」
橘「何⊠そんな事が可能なのか…だがタダでそんな美味い話があるはずがない…条件はなんだ…？」
ありす「話が早くて助かりますわ、貴方にはプリキュアのサポートをして欲しいので

すわ」
橘「プリキュアを知ってるのか…？」
ありす「立ち話もここまでにして、お茶でもしませんか？」
橘「わかった…」
ぶぅぅぅぅぅぅん！

橘「流石四葉財閥…家も規格外だ…」
セバスチャン「橘様、さっそくですがベルトをお調べいたしますので」
橘「わかった…本当に俺の身体は治るんだろうな？」
セバスチャン「えぇ四葉財閥の全科学捜査を使って原因を調べますのでご心配なく」
ありす「では橘さんこちらへ」

六花「ありす、しばしお待ちをって言ってかなり経つけど大丈夫かしら？」
マナ「誰かをここに招待するって言ってたけどね？」
ガチャ
ありす「マナちゃん、六花ちゃんお待たせいたしました」
六花「もう、どこ行っていたのよ？まさか来週のお茶会を今日やったのと関係あるわけ？」
ありす「はいその通り、お二人には話があって今日お呼びしたのですわ」
マナ「話って？」
ありす「それは勿論、プリキュアの事ですわ」
マナ「え！」
六花「どうしてそれを？」
ありす「セバスチャン」
セバスチャン「はい」ピッ
ランス「どうもでランス～」
マナ、シャルル、六花、ラケル「「「「ラ、ランス☒」」」」
シャルル「ランス、これはどう言うことシャル？」
ランス「それは…学校でみんなに置いて行かれた後町で倒れてた所をありすに助けて

もらったでランス～」
マナ「なるほどね」
ラケル「プリキュアの秘密を喋っちゃダメケル」
ランス「怒られたでランス」
ありす「この子を責めるのはお門違いですわ。セバスチャン」
セバスチャン「はい」ピッ
マナ「あれ巨大スクリーンが出てきた？」
プリキュア！ラブリンク！
マナ「こ、これは☒」
ありす「クロバータワーの防犯カメラの映像です。私が気づいてクシャポイしたからよかったものの危うくプリキュアの正体が世界中にしらわたるところでしたわ」
シャルル「それは困るシャル‼？」
マナ「お願いありす！この事は秘密にして‼？」
セバスチャン「ご安心を、この件は私とお嬢様以外誰も知りません」
マナ「はぁーよかったー」
ありす「ですが油断は出来ませんそこでご提案があります」
六花「提案？」

ありす「私にマナちゃん達をプロデュースさせてくださいな」
ガチャ
橘「やはりそう言う事か」
マナ「え⊠橘さん⊠」
六花「誰？」
マナ「いつも家にご飯食べにきてくれる常連さんだよ」
六花「え！ことは今の会話…」
橘「全て聞かせてもらった」
シャルル「がーん‼？またプリキュアの正体がバレてしまったシャル‼？」
橘「それを踏まえて二人に謝りたい…」
マナ、六花「「え？」」
橘「俺は、仮面ライダーギャレン一度君達を襲った仮面ライダーだ…」
マナ「えぇぇぇぇ‼？橘さんが仮面ライダー⊠」
六花「まさか貴方あの時の‼？」
橘「本当にすまなかった」
マナ「ぜんぜん大丈夫ですよ」
六花「それよりどうして仮面ライダーの人がここに？」

ありす「はい、恐らく橘さんは気づかれていますが、２度とマナちゃんたちに危害を加えないように色々と誤解を解く必要がありましたから」
六花「まさかさっきの時間？この人を呼びに行ってたの？」
ありす「はい、四葉財閥の情報網を使えばどこに誰がいるのか把握できます」ニコッ
六花「凄いわね四葉財閥」
マナ「あの！橘さんが仮面ライダーだったなんて！驚きです！これからよろしくお願いします！橘さん！」
橘「あぁ」

マーモ「それ、本当なのイーラ？」
イーラ「あぁまた新しいやつだ。こう青くてふわっとしてキラキラしてやがってさ」
マーモ「あら？惚れたの？」
イーラ「違うよ‼？」
ベール「じゃあなんだ？新しいプリキュアにおそれをなして逃げ帰ってきたのか？」
イーラ「あんなの何人いようが怖いものか」

ベール「でも負けたんだろ？」
イーラ「うるさいな‼？」
マーモ「それにしてもプリキュアってまだ増えるのかしら？あーやだやだ」
ベール「早めに滅ぼした方がいいだろうな、あのトランプ王国のように」

マナ「そういえばプロデュースって」
六花「何するの？」
ありす「それは…」
ピコンピコン
橘「それは、アンデッドサーチャー？」
ありす「はい、それもより正確な位置を察知できるものです。これでジコチューやアンデッドの位置をより早く把握する事ができますわ」
マナ、六花「アンデッド☒」
橘「ジコチュー☒」
ありす「あら？皆さんもうどちらも戦っていらしたのでわかっていたと思っていましたわ」

シャルル「とにかく！ジコチューのところに急ぐシャル‼？」

ｉＰｏｄジコチュー「音漏れぇぇぇぇぇ‼？」
わーきゃー
イーラ「いいぞ！ジコチュー‼？」
ハート「待ちなさい‼？」
ハート「漲る愛キュアハート」
ダイヤモンド「英知の光キュアダイヤモンド‼？」
ハート「うぷ」
ダイヤモンド「ちょっと大丈夫☒」
ハート「酔った…」
ギャレン「何してんだ！行くぞ‼？」
イーラ「やれ！ジコチュー」
ジコチュー「ボリュームＭＡＸ‼？」
ハート、ダイヤモンド「ふっ‼？」

ギャレン「うわぁぁぁぁぁ!!?」
ハート「橘さん！」
ハート「はぁぁぁ!!?」ドンッ！
ジコチュー「ジコ!!?」
イーラ「いいぞ！ジコチューやれ!!?やれ!!?」
ランス「3人とも頑張ってるでランス…さぁありす！僕たちも変身!!?」
ありす「このお茶も美味しいですわ」
セバスチャン「勿体ないお言葉」ペコ
ランス「すう”う??”何やってるでランス⊠僕達も戦うでランス!!?」
ありす「心配ありません。それに既に勝負はついています」
ジコチュー「ジコチュー!!?」カスッ
ジコチュー「え?あれ?え?」
イーラ「どうした?大丈夫か?ん?電池切れだと!!?」

ありす「今です」
ダイヤモンド「ハート」

ハート「うん！貴方に届け！マイスイートハート‼？」
ジコチュー「ラブラブラーブ」
ギャレン「またハートになった…そうかあれがジコチューか…」ガチャン

セバスチャン「駅前の監視カメラ含めて全て消去しておきました。ネットなどに挙げられていた目撃情報なども併せて消去済みです」
ありす「ご苦労様」
マナ「執事さんって本当に凄い人ですね！」
セバスチャン「いえ、それほどでも」
ありす「とまぁこのように私がプロデューサーとしてお二人をしっかりサポートしますわ」
六花「まぁこれなら安心して…」
ランス「ありすはどうして戦わないランス？マナも六花も橘も一生懸命戦っているのにありすだけ後ろでお茶を飲んでいるなんて、おかしいでランスよ‼？」
シャルル「ランス？」

ランス「ありすもプリキュアに変身して一緒に戦うべきでランス」
橘「…」
マナ「そうは言ってもさ」
六花「ありすはキュアラビーズを持ってないでしょ？」
ありす「それでしたらこちらに」
六花「キュアラビーズ⊠なんで？」
ありす「クロバータワーで露店のお兄さんにいただきました」
ランス「これではっきりしたランス、ありす僕は君と巡り合うためにこの世界にきたでランスお願いランスプリキュアになって僕と一緒に戦って欲しいでランス‼？」
ありす「…」
ありす「ごめんなさい、私プリキュアにはなりません」
ランス「がーん‼？ありすのばかー！」
シャルル、ラケル「ランスー」
マナ「ランス…」

橘「ありす…？さっきなぜ断ったんだ？」
ありす「ただ戦うのが怖いだけですわ」ニコッ
橘「本当にそれだけなのか？」
ありす「はい」
橘「そうか…俺はそれが本音には見えないな…戦うのが怖い奴が、わざわざ友人の為に俺を雇いにくるか？」
ありす「…」
ありす「少し昔話をしてもよろしいでしょうか…」

ランス「はぁ…ありすはなんでプリキュアになってくれないランス？」
マナ「その理由ひとつだけ心当たりがあるかな？私たちおんなじ小学校だったんだけどね、ありすはお嬢様で物珍しかったから、からかわれることも多くてさ。」
六花「一回マナが、ありすにちょっかい出してた男の子を注意したんだけど…」
ラケル「どうなったケル？」

六花「それがね…その子達が中学生のお兄ちゃん連れてきて…調子に乗った2人がマナの悪口を言ったの…そうしたらありすが怒って喧嘩を始めちゃったの」
ランス「ありすが喧嘩を?それでどうなったでランス?」
マナ「それがね」
六花「ありすはおじいさんの教えで沢山習い事をしてたの。ピアノや習字だけじゃなくて。空手に柔道、剣道、合気道」
ランス「まさか」
六花「ありすは中学生のお兄ちゃん含めて全員倒しちゃったの」

ありす「それ以来、私は武道のお稽古を全部やめましたわ。私は力を得た時にまたいつ自分が抑えられなくなるのか怖いのです…」
橘「わからないな…力は自分を愛する人達を守る為にあるものだ」
ありす「‼?」
橘「俺も昔は誰かを助ける事が嬉しくてしょうがなかった…今はこんな有様だが…」
ピコンピコン
橘「アンデッドか…俺は行ってくるぞありす!」

ありす「…」
セバスチャン「お嬢様マナ様達も既に現場へ向かったそうです」
ありす「そう」
セバスチャン「よろしいのですか？本当はご一緒に戦いたいのではないのでしょうか？」
ありす「…」
セバスチャン「私、長らくお使いして築きましたが、やはりお嬢様が一番輝いている時は、マナ様達とご一緒にいる時だと思います」
ありす「…」
セバスチャン「時には素直になられてはいかがですか？」
ランス「そうでランス！」
ありす「ランスちゃん？」
ランス「プリキュアの力は大切な人を守るための力ランス！それを怖がっちゃダメでランス」

橘『力は自分の愛する人達を守る為のものだ』

一郎『ありす、話は聞いたぞ。力とは相手を打ち従えるものではない。よく考えよ、お前が拳振るったのはなんのためだ？力は己を愛するものを守る為のものそれを忘れなければ二度と力に飲まれることはない。ありす恐るな己を磨き心を鍛えよ！」

ありす「力とは、大切なものを守る為のもの」
ピカー
ありす「ありがとうランスちゃん、私はもう恐れません‼？」

ラジカセジコチュー「俺のサウンドよく聞けよ」

六花「今度はラジカセか…」
マナ「ラジカセ？」
橘「早く行くぞ、被害が大きくなる前に」
マナ、六花「「プリキュア！ラブリンク!!？」」
橘「変身!!？
ＬＯＶＥ
ターンアップ
ハート「漲る愛！キュアハート!!？」
ダイヤモンド「英知の光!!？キュアダイヤモンド!!？」
ギャレン「…」
ギャレン「それいつもやらなきゃいけないのか…」
ギャレン「ギャレンだ!!？」ばきゅーん
ジコチュ「ジコ！よくもやったな、お返しだｙｏ！」プシュー
ギャレン「うわぁぁぁぁあ」
マナ「橘さん！」
ダイヤモンド「また電池切れを待つしかないわね」
イーラ「バカめ！あれを見ろ!!？」

ハート「電源ケーブル！」
ギャレン「なら、それを切ればいい話だ！はっ！」バキュン
ジコチュー「ｙｅａ」プシュー！
ギャレン「うわぁ‼？」
イーラ「近づけるわけないだろ！よしジコチュー！奴らを捕まえろ！」
ジコチュー「ゲッチュー」
ダイヤモンド「これは☒」
ハート「ビデオテープ」
ギャレン「離せ！離せ！」
イーラ「誰が離すかよ！そのまま振り回せ！」
ジコチュー「回る、回るｙｏ」
ハート「うわぁぁぉ！」
ダイヤモンド「きゃあ！」
ギャレン「うわぁぁぁぁぁ」ガチャン
橘「まずい変身が…」
ハート「達さん…」
イーラ「ジコチュー！とどめだ‼？」

ジコチュー「ＯＫ　Ｂａｂｙ」
ありす「お待ちなさい、それ以上私の大切な友達を傷つけるのは許しません」
ハート、ダイヤモンド「「ありす」」
ありす「ではランスちゃん、お願いできますか？」
ランス「勿論ランス！」
ありす「プリキュア！ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
ロゼッタ「ひだまりポカポカキュアロゼッタ！」
ダイヤモンド「ひだまりポカポカ？」
ハート「キュアロゼッタ！」
橘「そうだロゼッタ…それがお前の導いた答えなら…ごほっ‼？ごほっ…！それでいい‼？」
イーラ「また増えた☒」
ロゼッタ「世界を制するのは愛だけです！さぁ貴方も私と愛を育んでくださいな」
イーラ「なんだそりゃ？やっちまえジコチュー‼？」
ジコチュー「ｏｈ　ｙａｙ」プシュー
ロゼッタ「はぁ！」

ジコチュー「うわあわ！」
ロゼッタ「凄い…これが大切な人を守る為の力…」
ピカー
ハート「ロゼッタ！」
ジコチュー「これはどうだい？ボリューム最大、俺の強さを受け取るかい？」プシュー
ロゼッタ「かっちかちの！ロゼッタウォール！」
橘「防いだ！」
イーラ「だが防御だけじゃな」
ロゼッタ「いいえ、防御こそ最大の攻撃です！」パンッ！
ジコチュー「…!!?……!!?」
イーラ「音が消えた？」
ハート「なんで？」
ダイヤモンド「そうか！ノイズキャンセリング！」
ロゼッタ「今です!!?」
ハート「うん！貴方には届け！マイスイートハート!!?」
ジコチュー「ラブラブラーブ」
イーラ「くそ！覚えてろよ！」

橘「またハートか」

ランス「ありがとうありす！君こそ僕の最高のパートナーランス」
ありす「これからもよろしくね」
六花「これでプリキュアも3人ね」
マナ「橘さんも合わせれば4人になったのね」
シャルル「キュアソードも入れれば5人になるシャル」
ありす「キュアソード？」
マナ「もう1人プリキュアがいるの、まだ敵か味方かわからないけど」
六花「でもあの時、キュアソードは橘さんから私達を守ってくれたわ」
マナ「じゃあ味方かな？」
シャルル「キュアソードの正体は誰なんだシャル？」
橘「なんだ、てっきりもう仲間だと思ってたよ」
マナ「橘さん！キュアソードが誰か知ってるんですか？」
六花「確かにあの時、知り合いみたいだったわね。」
ラケル「キュアソードの正体はなんなんだケル？」

橘「それはな」てくてく

まこぴーポスターの前に立つ橘

マナ「え？」

六花「まさか？」

橘「キュアソードの正体は剣崎真琴、仮面ライダーブレイド剣崎一真の妹だ」

マナ「えええええええええ!!？」

次回剣崎兄妹

剣崎兄妹

剣崎兄妹

六花「それ本当何ですか橘さん？」

橘「あぁ数週間前から、俺と剣崎と真琴は、アンデッドやジコチューと戦っていたんだ」

六花「お兄さんいたのね」

ありす「しかもお兄さんも仮面ライダーと言うことで」

マナ「くぅ～！」

六花「マナ？」

マナ「まこぴーがプリキュア！アイドルとプリキュアを両方こなしちゃうなんて凄すぎる‼？くぅー‼？こうしちゃいらんない！」ダッ！

六花「ちょっとどこ行くのよ？」

マナ「まこぴーにあってくる！」

六花「当てはあるの？」

マナ「うっ」

六花「そもそも相手は芸能人簡単に会えるわけないじゃない」
橘「待て」
六花「どうしたんですか橘さん？」
橘「剣崎の家ならいるかもしれない。でも確か引っ越したらしいから、一度電話をかけてみる」

虎太郎「真琴ちゃんまだ帰ってこないね…橘さんに話をしてくるって言ってたけど…」
剣崎「…」
虎太郎「剣崎君？」
剣崎「もしさ…橘さんの言うようにライダーシステムを使い続けて体がボロボロになったらどうしようって…」
虎太郎「剣崎君…」
剣崎「でもそれってめっちゃカッコ良くないか☒人類の為に戦って正義の為に戦って

滅びていくヒーロー⁉？」
虎太郎「馬鹿なこと言うなよ…そんなことないって」
剣崎「心配…してくれるのか…？」
虎太郎「当たり前だろ！そんな話信じたくないよ！いや、僕は信じない」
剣崎「嬉しいなぁ‼？こんな俺でも心配してくれる奴がいる」
虎太郎「剣崎君？」
剣崎「俺不器用でさあんまり友達作ってこれなかった。でも小太郎は心配してくれる」
虎太郎「虎太郎て呼ばれるのはやだけど…心配するよ。君は大切な友達だから」
剣崎「サンキュー‼？」
プルプル
剣崎「電話？」
虎太郎「誰から？」
剣崎「もしかしたら真琴かもしれない。」ピッ
橘「あぁ剣崎か」
剣崎「ぅえ！橘さん☒」
虎太郎「なんだって？橘さん☒」

ベール「４人目のプリキュアだと？」
イーラ「たくっ次から次へと増えてるよ！おまけに仮面ライダーもプリキュアと協力し出したし。そのうち１００人くらいになっちまうんじゃねぇの？」
ベール「そうなる前にお前始末しておけよ」
イーラ「なんで人任せなんだよ？」
ベール「まぁ１０００人まで増えたら本気出すわ」
イーラ「この野郎」
マーモ「でもこれ以上人数が増えたら厄介よ、王女の手がかりを得るまでは泳がせておくつもりだったけど手遅れになる前に潰しちゃおうかしら？」

白井宅
マナ「あれ？」

六花「ここって？」
マナ、六花「「虎太郎（さん）のお家じゃないの（じゃん）‼？」」
橘「なんだ知り合いなのか？」
マナ「知り合いも何も」
六花「私の叔父の家です、まさか仮面ライダーが家に住んでたことが本当だったなんて…」
ありす「とりあえず、家に入れてもらいましょう」
マナ「そうだね、虎太郎さーん‼？」
六花「インターホン押しなさいよ」
ガチャ
虎太郎「やぁマナちゃんこんにちはってえ‼？六花ちゃんに…君は⁉？」
ドタドタ
剣崎「橘さん！急に家の連絡先聞いてどうしたんですか⊠」
六花「貴方は‼？」
剣崎「あ、君はいつかの…あの後大丈夫だったのかい？」
六花「なんとか立ち直りましたけど、それより虎太郎！家に剣崎真琴が住んでるってなんで教えてくれなかったの？」

虎太郎「え？どこでそれを？」
剣崎「まさか橘さん真琴のこと言ったんですか？」
橘「あぁ」
剣崎「なんて事してくれるんですか？真琴は芸能人ですよ？あいつにだってプライバシーがあるんですよ？」
マナ「あの！」
剣崎「あれ？君は豚のしっぽ亭の…」
マナ「今日どうしても妹さんに話があってきたんです！」
虎太郎「話って？」
マナ「それは…」
橘「…」
ありす「…？」
虎太郎「マナちゃん…？」
六花（あ、そうかキュアソードの正体を知っているのは橘さんとお兄さんだけ、虎太郎はプリキュアの事を知らないんだわ。だからマナは何も話さないんだ）
橘「とにかく真琴に合わせてくれ」
剣崎「真琴は今家にいませんよ…あいつ橘さんにライダーをやめさせるって言ってか

らまだ帰ってきてないんです」
橘「なるほどそう言う経緯か…あいつならあったぞ」
剣崎「ヴェ！」
橘「てっきり家に帰ってると思っていたんだがな…」
剣崎「そうですか…」
ありす「あ」
マナ「どうしたのありす？」
ありす「今日ヨツバスタジオで真琴さんの収録がありますわ」
六花「えぇ…それ最初に言わないと」
ありす「是非とも真琴さんのご自宅を一度お目にかかりたいと思って」
剣崎「君、この家は見物品ってわけじゃないんだぞ」
虎太郎「まぁまぁ剣崎君落ち着いて」
橘「とにかく、居場所がわかったのならヨツビスタジオに向かおう」
ありす「ではセバスチャン」
セバスチャン「はい、では皆様お車に御乗車
ください」
虎太郎「うわ、高そうな車」

橘「わざわざ話を聞いてくれてすまないな剣崎」
剣崎「そんな、いいですよ。それより俺もついて行っていいですか？真琴のやつまだ一度も家に帰ってなくって、俺心配なんです」
橘「だそうだが、どうだ？」
ありす「真琴さんのお兄様ですので。断る理由がありません」
剣崎「すまない、恩に切るよ！」
虎太郎「え、じゃあ僕もいかせてよ！」
六花「虎太郎はダメよ！」
虎太郎「なんで！」
ありす「では、虎太郎さまご機嫌よう」
ぶーん
虎太郎「いいさ、意地でもついて行くよ」
ぶーん

六花「テレビ局に来たのはいいものの、どうやって中に入るの？」
橘「警備員もいるし、やっぱり簡単には…」
ありす「…」てくてく
六花「ちょ、ちょっとありす⊠」
警備員「いらっしゃいませ」ペコ
ありす「ご機嫌よう」
六花「へ？」
マナ「なんだ普通に入れるじゃない」てくてく
警備員「…」
マナ「ご機嫌よう！」
警備員「お待ちください！ここから先は関係者以外立ち入り禁止です！」
マナ「え！」
剣崎「なら俺ならいいか」てくてく
警備員「お待ちください！」
剣崎「なんだよ！どけよ！俺は真琴の兄だ！」
橘「落ち着け剣崎」
ありす「いいんです、その方々は私のお友達ですから通してあげてください」

警備員「はっ！失礼いたしました」
橘「なるほどやはりそう言う事か」
マナ「どう言う事なんですか橘さん？」
橘「この撮影スタジオ、ヨツバスタジオと言ったなつまり」
ありす「はい、私のお父様が経営するスタジオですわ」
六花「名前で気づくべきでした」
剣崎「君すごいな～お金持ちなんだな～」
橘「剣崎…お前四葉財閥を知らないのか？」
剣崎「なんですかそれ…？」
橘「世間知らずにも程があるぞ…」

ありす「ここが真琴さんの収録スタジオですわ」ガチャ
真琴「フラーイ♪」うわ
マナ「この曲」
剣崎「おぉ…」
六花「これが芸能人…」

ディレクター「ｏｋ、よかったよ真琴ちゃん」
真琴「ありがとうございます！本番もよろしくお願いします！」
マナ「わー！まこぴーだ‼？」
ありす「素敵なおかたですわね」
剣崎「そう言ってくれると鼻が高いよ」
橘「なぜお前が威張る」
六花「目的を忘れないで、キュアソードに仲間になってもらうんでしょ？」
ありす「はい」ニコッ
六花「うん」
橘「…」
ありす「…」
六花「ん？次の作戦は？」
ありす「ありませんけど？」
六花「えええ‼？」
ありす「六花ちゃん」
六花「何？」
ありす「しーですよ」ニコッ

六花「え？」
スタッフ達の冷たい視線
六花「あ、すみません！」
スタッフ「じゃあ次のリハーサル行きまーす！」
ありす「大丈夫きっとマナちゃんがなんとかしてくれますわ」
橘「そういえばマナちゃんは？」
六花「…」キョロキョロ
六花「え⊠」
ありす「ちなみに剣崎さんもいませんね」
橘「何ィ！」
六花「マナ！マーナ‼？」
橘「剣崎！ゲゲゲェ‼？」
ありす「お二人とも」
六花「‼？」
橘「‼？」
ありす「しーですよ」ニコッ
スタッフ達の怒りの視線

六花「ごめんなさい。ごめんなさい。」
橘「すみませんでした。」

剣崎真琴の楽屋
真琴「この後のの予定は？」
ＤＢ「１時間後にファッション誌の撮影、その後はラジオのゲスト出演、移動中の車内でインタビューが５件あるわ、夜はアルバムの打ち合わせ、あそうそう今のうちにサイン書いておく？」
真琴「そうね、すぐに始めるわ」
ＤＢ「最近ちょっと忙しすぎるわね」
真琴「平気よ私の歌を待ってくれてる人のためだもの」
ＤＢ「そうね、飲み物でも買ってくる」ガチャ
真琴「…」
真琴「疲れてる暇なんてないのよ」
コンコン

真琴「？」
真琴「どうしたの？お財布でも忘れたの？」
ガチャ
マナ「失礼します」
真琴「貴方！あの時の⊠」
マナ「はい！私キュアハートです！」
真琴「！」
マナ「私の仲間になってください！」
真琴「え⊠」
マナ「私！あれから経験を積んだんです！仲間も４人になりました！まこぴーは私の憧れで、とっても可愛いのに歌う時は凛々しくてすごいなーて思ってたんです！そんなアイドルがプリキュアだったなんて本当に感激です！」
真琴「…」
マナ「まこぴーが仲間になってくれたら百人力、いや千人力ですよ‼？」
真琴「…」
マナ「あれ？え、えーとキュアソードさんですよね？」
真琴「なんのことかしら？」

マナ「え！」
ガチャ
真琴「！」
剣崎「しらばっくれんなよ真琴！」
真琴「一真！どうしてここに？」
剣崎「別にお前がキュアソードってことぐらいみんな知ってる、この子と、一緒に戦えばいいじゃないか！」
真琴「…」
真琴「貴方達…ここがどう言う場所だかわかってる☒」
マナ、剣崎「「☒」」
真琴「テレビ局よ！私達がお茶の間に夢を届ける場所なの！貴方達の都合で踏み荒らしていい場所じゃないわ！」
マナ「…」
剣崎「真琴…」
ＤＢ「ちょっとなんの騒ぎって…え、一真？」
橘「やはりここにいたか」
六花「マナ！」

真琴「これから大事な本番があるの！今すぐ出て行って！」
剣崎「おい！なんだよその言い方！こっちはお前の為を思ってやってるんだぞ！」
真琴「本当に私の為を思うのなら、私の歌の邪魔をしないで！」
剣崎「なんだと！」
橘「落ち着け、剣崎」
剣崎「離してください橘さん！」
マナ「…」
六花「マナ行こう」
ありす「…」ペコ
真琴「…」
真琴「どうかしてるわ…」
ＤＢ「そうね…でも貴方への熱意は感じたわ」
真琴「…」

六花「全く何考えているのよ…勝手に突撃して…」

橘「そうだ、いくらプリキュアの仲間だとしても、彼女は仕事中だもうちょっと考えて行動するべき…」
ありす「お二人ともあまり責めないであげてください。」
マナ「私、手を繋げば誰とでも友達になれると思ってたプリキュア同士なら尚更きっと仲良くなれるに違いないって、でも大切な事忘れてた。仲良くなるにはちゃんと相手の気持ちを解ろうとしなきゃダメなんだ。まこぴーはアイドルで歌を歌うことが大事なことなのに真剣な気持ちを邪魔しちゃった」
剣崎「…」
ありす「マナちゃん…」
ＤＢ「ちゃんとわかってくれたみたいね、剣崎真琴はいつも真剣、だからあの子の歌は心に響くの」
六花「貴方は！」
ありす「マネージャーさん！」
ＤＢ「あの子不器用だから普段はあんな言い方しかできないけど、その歌には大切な願いが込められているの、それは自分の歌を聴いてくれた人が笑顔になってくれること、だからいつも最高なパフォーマンスを披露しなくちゃいけないの、貴方にはそういうのない？」

マナ「！」
マナ「私、謝りたいです」
ＤＢ「わかった時間を作ってあげるわ」
マナ「ありがとうございます！」
剣崎「…」
ＤＢ「一真？」
剣崎「なんだよ…」
ＤＢ「貴方達は本当に不器用だから、相手を思ってるはずなのに上手く相手に伝えられない。それは見ていてわかるわ。でもしっかりと話し合えばきっと伝わるはずよ。だから貴方も真琴の気持ちを理解した上で、もう一度話し合って」
剣崎「あぁ…」

真琴「フラーイ♪」

ハルナ「何よ、ディレクターもカメラマンもうっとりしちゃって。あんな子がトップアイドルなんて認めない。みんなの注目もスポットライトも全部私のものなんだから…でもぶっちゃけ歌も踊りも負けてるもんね…もっと練習しよ」
マーモ「いいんじゃない？好きなだけ注目浴びちゃえば」
ハルナ「誰⊠」
マーモ「貴方の望み叶えてあげる」
ハルナ「うわ！」
マーモ「暴れろ！お前の心の闇を解き放て！」
スタージコチュー「ジコチュー」
真琴「嘘！こんな時に！」

シャルル「マナ…！マナ…！」
マナ「どうしたのシャルル？」
シャルル「闇の鼓動シャル…！」
マナ「嘘…！」

シャルル「急ぐシャル…！」
マナ「でもマネージャーさんがいるからプリキュアの話ができないよ…」
橘「その心配はないぞ」
マナ「橘さん？」
橘「ＤＢもプリキュアの関係者だ」
ＤＢ「もう…」
ダビィ「もう少しかっこよく登場したかったビィ」
ラケル「妖精になったケル！」
ダビィ「とにかく急ぐビィ！私がいないとなったら真琴は変身できない！」
マナ「急ごう！」

ジコチュー「この舞台は私のものよ！貴方は降りなさい‼？」
わーきゃー
真琴「くっ！こんな時に！私は降りないわ！貴方達に撮影の邪魔はさせない！」

ジコチュー「ならば見せてあげるわこれがスターの力よ！」ブンッ！
マーモ「まずは1人かしら？」
真琴「…！」
剣崎「変身!!？」
ターンアップ
サンダー
ブレイド「ウェイ!!？」
ジコチュー「ジコ!!？」
真琴「一真!!？」
ブレイド「大丈夫か真琴！」
真琴「どうして助けに来たの…？」
ブレイド「？」
真琴「私は貴方に酷いこと言ったのに…」
ブレイド「それは俺もだよ…ごめんお前が歌をどれだけ真剣にやってるか…俺はわかってなかった。」
真琴「…」
ブレイド「でも俺はお前を1人では戦わせない！たとえこの体がボロボロになろうと

もな！」
スラッシュ
ブレイド「ウェイ！」
ジコチュー「ジコ！」
六花「あれは！」
ランス「ジコチューでランス！」
橘「アンデッドであれ…！」シュプシュー
マナ「みんな行くよ！」
マナ、六花、ありす「「プリキュア！ラブリンク!!？」」
橘「変身!!？」
ＬＯＶＥ
ターンアップ
ハート「漲る愛！キュアハート!!？」
ダイヤモンド「英知の光！キュアダイヤモンド!!？」
ロゼッタ「ひだまりポカポカ、キュアロゼッタ！」
ギャレン「ギャレンだ！」
ハート「愛を無くした悲しい星さん！このキュアハートが貴方の愛を取り戻してみせ

る！」
ブレイド「凄い！本当にプリキュアになった」
ジコチュー「貴方達、さては新人アイドルユニットね…」
ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ「え？」
ギャレン「人をおちょくってるとぶっ飛ばすぞ‼？」
ジコチュー「見なさい！これがスターの輝き‼？」ピカー
ダイヤモンド「う、眩しい！」
ジコチュー「スターの座は渡さない！」
ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ「「うわぁ！」」
ジコチュー「剣崎真琴！見なさい！これがスターの輝き！」
真琴「う！」
ジコチュー「食らいなさい！」
ブレイド「真琴！」
ブレイド「うぇあ‼？」
真琴「一真！」
ジコチュー「食らいなさい！ライバルクラッシュ‼？」
真琴「…！」

ハート「危ない！」
真琴「！」
真琴「貴方どうして！」
ハート「誰にも邪魔させない！ここはまこぴーの大事なステージなんだから！」
真琴「！」
ハート「まこぴーにはみんなが笑顔になる歌を届けてほしいから！」
ハート「はあぁぁぁぁぁ‼？」
ジコチュー「ジコ‼？」
ハート「はぁ…はぁ…」
マーモ「私…暑苦しいの苦手なの。やっておしまいジコチュー！」
真琴「待ちなさい！」
ジコチュー「‼？」
真琴「貴方の狙いは私でしょ？なら相手してあげるわ！」
ハート「まこぴー…」
ブレイド「真琴…」
真琴「行くわよダビィ！」
ダビィ「待ってたビィ！」

真琴「プリキュア！ラブリンク‼？」
ＬＯＶＥ
ソード「勇気の刃！キュアソード‼？」
ハート「キュアソード！」
マーモ「やっとお出ましのようね…ジコチュー！」
ジコチュー「スターの輝き‼？」
ソード「はぁ！」
ジコチュー「うわ！」
ソード「こんな攻撃見なくても避けられるわ」
ハート「凄い…」
ソード「煌めけ！ホーリーソード‼？」
ジコチュー「らぶらぶらーぶ」
ギャレン「またハート…！」
マーモ「く！覚えてらっしゃい‼？」
ハート「あの…ありがとう！」
ソード「私はただジコチューを野放しに…」
ブレイド「やったなソード！さすが俺の妹だ！」

ブレイド「こんな不器用な妹だけど、これからもよろしく頼むよ！」
ソード「ちょっとやめてよ！一真！」
ブレイド「照れちゃって」
ソード「！」ブンッ！
ブレイド「うわぁ！」
ソード「！」ダッ！
マナ「あ…行っちゃった…」
ギャレン「剣崎…大丈夫か？」
ブレイド「いってて…年頃の女の子はわかんないや…」

豚のしっぽ亭
マナ「あ、まこぴーがテレビ出てる！」
六花「収録は無事に行われたようね」
マナ「でも結局まこぴーには謝らなかったな…」
ガチャン

ＤＢ「マナはいるかしら？」
マナ「え、マネージャーさん？どうしてここに」
ＤＢ「言ったじゃない時間を作るって、ほら受け取って」
ダビィ「じゃあ私は真琴のところに戻るビィ！」
六花「マナ？何もらったの？」
マナ「これは？」
ありす「真琴さんの握手会のチケットのようですわね」
マナ「！」
剣崎「行ってきなよマナちゃん」
マナ「はい！じゃあ行ってくる！」

剣崎真琴ファン感謝祭
ファン「いつも応援してます！」
真琴「ありがとうございます」
ファン「やったー」

ＤＢ「次の方」
ＤＢ（来たわね）
マナ「今日はファンとして来ました」
真琴「貴方…」
マナ「この前はごめんなさい」
真琴「もういいわよ」
マナ「あの…私気づいたんです。まこぴーにとっての歌と同じように、あたしにもやらなくちゃいけない大事なステージがあることに」
真琴「！」
マナ「まこぴーみたいに素敵にはできないんですけどそれでも一生懸命ベストを尽くしたいと思います」
真琴「貴方のやりたいことって何？」
マナ「みんなの笑顔を守ることです！」
真琴「！」
マナ「握手してもらえますか？」
真琴「えぇ」
マナ「！」

ギュッ
真琴「次の人が待ってるから…」
マナ「ありがとうございました」てくてく
マナ「あ、」
マナ「これお父さんに作ってもらった桃饅です！すっごく美味しいから早めに食べてください！じゃあ！」ダッ！
真琴「桃饅…？」
真琴（不思議な子…）

六花「マナうまく言ってるといいけどね」
ありす「マナちゃんならきっと大丈夫ですわ」ニコッ
剣崎「いやーそれにしてもびっくりしたよ！まさか真琴以外にもプリキュアがいたなんて」
橘「剣崎…あまりそう言うことを大声で言うな」

六花「そうですよ！誰か聞いてるかもしれないじゃないですか！」
剣崎「大丈夫大丈夫。今日はマナちゃん達のお母さんいないし店も休みなんだから俺達以外ここに来る人いないって」
虎太郎「今の話…本当…？」
剣崎「ぅぇ⁉？」
橘「！」
六花「え？」
ありす「あらあら」ニコッ
剣崎、六花「「こ、虎太郎‼？」」

次回バレちゃったキュアソードの正体

バレちゃったキュアソードの正体

バレちゃったキュアソードの正体
真琴「フラーイ♪」
ディレクター「真琴ちゃん今日も最高だったよ！」
真琴「…」
真琴（いつになれば…私の歌は王女様に届くのだろう？）
ＤＢ「真琴…？大丈夫？」
真琴「大丈夫よ」
ＤＢ「…」
ＤＢ「真琴料理番組のオファーがあるんだけど息抜きにどう…？」
真琴「やってみるわ、ただ条件があるわ」

六花「虎太郎！貴方どうしてここに？」
虎太郎「それは少し前に遡るんだけど、あの後みんなの車を追いかけようとして白鳥号を動かしたんだけど、エンストしちゃって追いかけれなかったんだ。それでこの悲しい気持ちを紛らわせる為に豚のしっぽ亭に来たら、剣崎君や六花ちゃんが入っていくのを見たからそれで…」
橘「それで盗み聞きしていたと言うわけか」
剣崎「お前ふざけんなよ！こそこそ隠れて男のすることじゃねぇよ‼？」
ありす「まぁまぁ剣崎さん、ばれてしまわれたものはしょうがないですわ。むしろ真琴さんがジコチューと戦う際に隠れて家を出る必要がなくなったではありませんか」ニコッ
六花「それも…そうね…」
剣崎「…」
剣崎「おい虎太郎‼？」
虎太郎「な、何？剣崎君？」
剣崎「真琴にはプリキュアがバレたってこと言うなよ！」
虎太郎「う、うん！もちろん知らないふりするよ‼？」

白井家
真琴「…」そーと
真琴「た、ただいま…」
ガチャ
虎太郎「あ、真琴ちゃん！お帰り‼？剣崎君！真琴ちゃんが帰ってきたよ！」
ドタドタ
剣崎「真琴！よく帰ってきたな！お帰り！俺嬉しいよ戻ってきてくれて！」
真琴「受け入れてくれるの？」
剣崎「当たり前だろ、家族なんだから」
虎太郎「さぁ入ってよ、今からご飯作るから真琴ちゃんも食べよ」
真琴「あ、そうだ。一真」
剣崎「なんだ？」
真琴「今日私に料理を教えてほしいの」
剣崎「あーそういえばそんな約束してたなーいいぜ！」

虎太郎「じゃあ今日は剣崎君達が作ってよ。２人が作った料理食べてみたい！」
剣崎「まかせろ虎太郎！剣崎家の最高の料理振る舞ってやるから！」
真琴「じゃあ一真お願い」てくてく
虎太郎「…」
虎太郎（料理なら僕が教えた方が上手くいくだろうけど、今は２人の時間だね…よかったね２人とも仲直りできて）
どんどんガッシャーングチャ
虎太郎「…」
虎太郎「なんか料理してる音じゃないんだけど？」
剣崎「待たせたな虎太郎！」
真琴「これが私達が作ったオムライスよ！」
虎太郎（見た目は普通のオムライスだ…）
剣崎「どうした虎太郎？」
虎太郎「ちょっと不安だったんだ、剣崎君ちゃんと教えられるかなって？」
剣崎「お前俺の事どう思ってるんだよ」
真琴「じゃあ早速食べてみましょう」
虎太郎「そうだねいただきます」

ピコンピコン
剣崎「アンデッド！」
真琴「何ですって⊠」
剣崎「すまん虎太郎！ちょっと行ってくる！」ダッ！
真琴「私も！」ダッ！
虎太郎「…」
虎太郎「真琴ちゃん本当にプリキュアなんだな…」パクッ
虎太郎「うっ…！」

ハート「貴方に届け！マイスウィートハート！」
ジコチュー「ラーブラブラーブ??」
ギャレン「何故…またハートなんだ！」
ロゼッタ「橘さん…」
イーラ「あー！もうまたやられたよ！覚えてろ！」シュン

ブレイド「よっしゃー！今日も俺達の勝利だな！」ガチャン
ソード「…」すたすた
ハート「あ、ソード！今日も一緒に戦ってくれて本当にありがとう！」
ソード「…」ピタ
真琴「勘違いしないで、私はジコチューが現れたから倒しにきただけよ」
剣崎「相変わらず素直じゃないな真琴は」
真琴「うるさいわね！帰るわよ一真！」
剣崎「はいはい、じゃあまたねみんな！」
ぶぅぅぅぅん

ガチャ
剣崎「ただいまーって虎太郎☒」
虎太郎「う…帰ってたの…？２人とも…」
剣崎「どうしたんだよ！誰にやられた？」

虎太郎「いや、ちょっと体調崩しただけだから…寝ればすぐに治るよ…僕は寝室に向かうね…」
剣崎「運んでいくよ…」
剣崎「もう夜遅いし真琴も早く寝ろよ明日仕事なんだろ？」
真琴「ええ、明日は料理のロケがあるから」
虎太郎「…！」
剣崎「だから今日俺と料理作ったのか、ちなみにどこいくんだ？」
真琴「それは…

豚のしっぽ亭
マナ「え！家にテレビの取材⊠」
健太郎「そうなんだよ！是非この店でって希望があったらしくって急に決まったんだ

！ここは豚のしっぽ亭2台目としてしっかり腕を振るわないと！」
マナ「大丈夫！パパの料理は日本一だもん！」
宗吉「わしはまだ認めておらんがな」
あゆみ「まぁまぁお父さんアイドルが来るって話だし笑顔でお迎えしましょ」
六花「アイドル？」
マナ「誰がくるの？」
あゆみ「えーとね確か…」
ガチャ
真琴「こんにちは」
ＤＢ「おはようございます」
マナ「まこぴー！」
真琴「…」
マナ「嬉しい！まこぴーが家に来てくれるなんて！」
真琴「仕事できただけよ…貴方のお家だったの？」
マナ「はい！私相田マナって言います！マナって呼んでください！」
六花「私は菱川六花です」
剣崎「そういえば自己紹介してなかったんだな」ひょこ

マナ「剣崎さん！」
剣崎「あ、どうも店主さん俺剣崎一真って言います！真琴も料理頑張るんでよろしくお願いします！」
ディレクター「じゃあリハーサル始まるんでスタンバイお願いしまーす！」
健太郎「は、はい！」
真琴「はい！」

カメラマン「はいでは明日の本番と同じ流れでリハーサルお願いしまーす」
真琴「よろしくお願いします！」
マナ「頑張れぱぱ…！」
剣崎「真琴昨日教えた通りにやるんだぞ…！」
六花「剣崎さんが料理を？」
剣崎「あぁ昨日ジコチュー達と戦う前料理を教えたんだ」

六花「なら、この撮影も順調に終わりそうですね」
カメラマン「それでは行きます3．2．…」ピッ
健太郎「そ…それでは本日は！家の看板メニューオム→ライス←に挑戦してもらいます⁉？ま、まずは下拵えから」
真琴「玉ねぎ、にんじんはみじん切りに、ベーコン、マッシュルームは薄くスライスします」
健太郎「それじゃあにんじん洗ってもらおうかな？」
真琴「はい！」
真琴（えーと確か野菜は泥とかついてるから…ちゃんと洗わないとダメよね…よし洗剤で洗えば綺麗になるわ）
どぼどぼごしごし
マナ、六花、あゆみ、宗吉「「「「え！」」」」
剣崎（よし！いいぞ真琴⁉？）←こいつが犯人
健太郎「せ、洗剤はなしで！ね？」
真琴「へ？」
ＤＢ「す、すみません！真琴料理するの初めてで！」
ＤＢ「…」ギロっ⁉？

剣崎「？」
ＤＢ（真琴に何教えたのよ一真‼？）
剣崎（ＤＢ…俺に感謝の眼差しを送ってくれてるのか？うっれしいなー！）サムズアップ
ＤＢ「！」イラッ‼？
ＤＢ（後で覚えてなさい…‼？）
健太郎「じゃ…じゃあ次はベーコンを切ってもらおうか？」
真琴「切る？」
真琴「切るのは得意です‼？」
健太郎「ふー」
マナ「得意なら安心だねー」
六花「え？でも構え方おかしくない？」
マナ「え？」
真琴（相手を断ち切る時…それは相手を敬い誠意を持って断ち切る…集中するの私…）
真琴「やっ‼？」ズバッ‼？
ベーコン、まな板「真っ二つやー」

マナ「あ、ありゃー」
剣崎「ダメだな真琴…」
六花「剣崎さんもそう思います？」
剣崎「あぁ机まで切って本当の一流なのにな…」
六花（待って…この人が原因なんじゃ？）
ＤＢ「本当にすみません！真琴料理初めてで！」
あゆみ「初めてじゃ仕方ないわね初めてじゃ」
カメラマン「つ、次行きましょ次…そうだ！卵破りましょ！」
健太郎「え？」
カメラマン「ハードル下げて…！」
真琴「卵？」
真琴（卵って確か破れば白い球が出てくるやつよね？残った殻を剥くのが大変なのよね…よしここは一気に掴んで）ガッ
健太郎「え⊠」
真琴「破ります」
グシャ
真琴（あれ何かしらこのドロっとしたもの？）

六花「あ」
六花「わざとじゃないんだよね？」
マナ「そうだよ…だってまこぴーの顔真剣だもん」
マナ「まこぴー！食べ物には愛情たっぷり優しくね！」
まこぴー「え？これ卵なの？」
宗吉「かー！卵すらしらねぇで何が料理だ！出直してきな！」
マナ「おじいちゃん…？」
剣崎「え？何で怒ってるんだ？」
カメラマン「ま、まー今日はここまでって事で明日本番よろしくお願いします」ガチャン
ＤＢ「本当にすみませんでした！」
ＤＢ「一真‼？」
剣崎「な、なんだよ！」ビクッ
ＤＢ「貴方を信頼していたけど！貴方昨日真琴に何を教えていたの☒」
剣崎「お、オムライスだけど…」
ＤＢ「じゃあ何であんな事が起きるわけ☒」
真琴「待って、一真を責めないで」

ＤＢ「真琴…」
真琴「今日は帰ります…ご迷惑おかけしました…」
ガチャン
マナ「まこぴー…」

ありす「まぁ！真琴さんがいらしたんですの？」
ランス「びっくりでランス」
マナ「大丈夫かなまこぴーちょっと失敗しちゃったし…」
六花「ちょっとじゃないけどね」
マナ「おじいちゃんにあんな風に言われて落ちこんでるんじゃ？」
シャルル「マナは本当にまこぴーの事が好きシャルね」
マナ「私まこぴー迎えに行ってくる！」
コンコン
橘「その必要はないぞ」ドア越し

マナ「橘さん？」ガチャ
虎太郎「僕達もいるよ」
真琴「…」
剣崎「…」
六花「虎太郎…！」
マナ「まこぴー！来てくれたんだ！」

剣崎「まずは真琴本当にごめん‼？」
真琴「いいえ私のせいよ。私が…もっと勉強すればよかったんだわ」
虎太郎「まぁまぁ昔の、事を気にしててもしょうがないよ」
虎太郎「でもまず、昨日２人が使ったオムライス食べてみてほしいんだ」
剣崎「お前持ってきたのか？」
虎太郎「みんなのスプーンも用意してるけど食べてみる？」

マナ「え？いいんですか？」
ありす「皆さまと食べる食事はなによりも美味しいですからね～」ニコッ
橘「俺も貰うよ」
六花「わ、私は…遠慮しとくね、何か嫌な予感がする？」
虎太郎「それじゃみんな食べてみて」
マナ「いただきまーす！あーむ」パク
ありす「…」パク
剣崎「…」パク
真琴「…」パク
ＤＢ「…」パク
橘「…」パク
マナ、剣崎、真琴、ＤＢ「「「「うっ‼？」」」」
ありす「あら～個性的な味付けですね」ニコッ
橘「…？」
マナ「…」
剣崎「なんだこの味は！」
ＤＢ「食べ物がしていい味じゃないわ…」

真琴「まさか昨日虎太郎が体調崩してたのって…」
虎太郎「いやー残しちゃ悪いと思ってさ半分ぐらい食べたんだけど…限界だったんだ…」
剣崎「虎太郎！ごめん‼？」
橘「？」パクパク
虎太郎「いいよ気にしないで…剣崎君も料理知らなかったんだからしょうがないよ」
虎太郎「そこで提案なんだけどみんなでオムライスつくろうよ！」
橘「そうだな…もぐもぐ…一度自分で体験する事で…もぐもぐ…技術と言うものは身につくからな…」
マナ「いいですね！やろ！みんな！」
六花「そうね、これは2人の為にもなるしね」
ありす「私も虎太郎さんに賛成ですわ」
真琴「私…料理をもう一度勉強したくって戻ってきたの…付き合ってくれる？」
マナ「勿論です！」
橘「フッ…青春だなっ…もぐもぐごっくん…なぁ残りのやつも食ってもいいか？」
剣崎「本当にうまいんですか…？」

虎太郎「まずは卵から」
真琴「よし、破るわよ」グシャ
マナ「肩に力入りすぎかも」
真琴「力？」
マナ「見ててください、卵ってそんなに力入れなくても破かれるんです」コンコンパカ
マナ「コンコンパカっのリズムです」
真琴「コンコンパカ？」
真琴「…」コンコンパカ
真琴「！」
真琴「できた！」
ありす「お見事ですわ！」
マナ「まこぴー！もう一回！」
六花「どうぞ」

真琴「…」コンコンパカ
マナ「やった‼?」
ありす「完璧ですわ！」
虎太郎「にんじんはトントントトトンかな?ほらこうやって」トントントトトン
剣崎「やっぱり虎太郎って料理上手いんだな」
虎太郎「見直した?」ニコッ
真琴「トントントトトン」
マナ「凄い！」
ありす「飲み込みが早いです」
虎太郎「玉ねぎはタンタンタタタンだね」
真琴「う、目が」
マナ「はい、ハンカチ使ってください」
真琴「あ、ありがとう」

真琴「できた…!!?」
剣崎「やったな真琴!」
ＤＢ「後は問題だった味ね…」
真琴「いただきます」パク
真琴「ん!美味しい!」
剣崎「本当か?」パク
剣崎「上手い!」
橘「やっぱり、しっかりとした手順でやれば誰でも上手いものは作れるんだな」
虎太郎「それだけじゃないよ、料理てさ、どんな人でも笑顔にできるものだからさ、相手の事を思って美味しくなーれ、美味しいくなーれって願いながら作るとより美味しくなるんだ!だから僕は料理が好きなんだ。」
六花「虎太郎ってたまにいい事言うよね」
虎太郎「だからその虎太郎って呼び捨てにするのやめてよ〜」
ぷっ!あはははは!!?
虎太郎「みんな笑わないでよ〜」
真琴「うふふ!」
ＤＢ「!」

ＤＢ（久しぶりに見たわ…あの子の笑顔）ニコッ

イーラ「フッはぁぁ‼?」ゴロゴロ
ボウリング「ガターだ」
イーラ「チッ！」
マーモ「うまくいかない時って何をやってもダメなのよね～」
イーラ「それは自分の事だろ‼?この間あいつらに負けたのはお前じゃないか‼?はっ‼?」ゴロゴロ
ボウリング「ガターだ」
イーラ「‼?」イラッ‼?
マーモ「負けたんじゃないわ勝たせてあげただけ」
ベール「不味いぞ」

マーモ「不味いのこのパフェ？」
ベール「そうじゃない、キングジコチュー様がお怒りのそうだ。俺達に残された時間、そう長くはない」
マーモ「イーラもっと頑張りなさい」
イーラ「頑張れじゃねぇーよお前も頑張るんだよ‼？」
ベール「やれやれ、そろそろ俺の出番かな？」

カメラマン「それでは本番お願いします！」
真琴「いきます」
マナ「頑張ってまこぴー…‼？」

真琴「トントントトトン」
カメラマン（おぉ‼？）
真琴「タンタンタタタン」
真琴「コンコンパカ」
司会「凄いよまこぴー！一晩でこんなに上達するなんて」
真琴「ありがとうございます」
カメラマン「はいじゃーこのままラストまで行っちゃいましょう！」
ありす「後は卵でチキンライスを包むだけですわね」
六花「そこが最大の難関だけど」
剣崎「真琴…頑張れ…！」
真琴（絶対に成功してみせる！昨夜あんなに付き合ってくれたみんなのためだもの）
ジュー
真琴「…」トントン
真琴「できた…」
マナ「やったねまこぴー‼？」
真琴「ふー」
カメラマン「あれ？なんかでかくないか⊠」

マナ「す、すみません！私がつい7人分の材料用意しちゃって…」
カメラマン「あー構いませんよ、せっかくですから皆さんで食べてるところを撮影させてください」
マナ「じゃあまこぴー！仕上げお願いします！」
真琴「仕上げ？」
マナ「このケチャップを使って。こうやってちゅーと」
真琴「ハートができた…！」
六花「マナらしいわね」
ありす「ラブリーですわ」
真琴「ねぇ！私にもやらせてくれない？」
マナ「勿論！どうぞ！」
真琴「…」
真琴（美味しくなーれ美味しくなーれ）
♤♡♢♧
剣崎「見てくださいよ橘さん！トランプのスターですよ！」
橘「美味そうだな」
マナ「凄い！まこぴー器用!!？」

真琴「それほどでもないわ」
ＤＢ（よかったわね真琴）

マナ、六花「「はむっ美味しい!!?」」
ありす「美味しいですわ!!?」
真琴「はむっ本当だ美味しい!!?」
真琴「虎太郎の言うと通り食べてくれる人を思いながら作ったらこんなに美味しくなった…!」
虎太郎「でしょ?」
あゆみ「料理初めてだったのにね」
健太郎「俺、感動したよ!!?」
宗吉「当たり前だ、あいつらが一生懸命作った料理だ。不味いはずがねぇ」
真琴（そういえば私も歌を歌う時、王女様がが笑顔になって欲しいって心を込めて歌ってたっけ。でも今はあの方を探すことに焦ってばかりで心を込めて歌えてなかった）

剣崎「真琴？どうした？」
真琴「大切な事を思い出したの」
真琴「みんなのおかげよ」
マナ「まこぴー！」

豚のしっぽ亭裏庭
「…」フワッ
「なるほど…ここにブレイドとギャレンが…それにクローバーの妖精もいるな…」
「よし…」
始「待て」
???「!!?」
始「この家に何するつもりだ？」
???「これは久しいなカリス…今からこの家を襲うつもりだがどうだ？お前も一緒にやるか？」

始「今すぐにやめろ」
???「フフッアハハハッ‼?」
始「⊠」
???「人間になりすましたつもりか?」
伊坂「カリス?」
始「黙れ」
伊坂「協力してくれないのならお前にかまっている暇はない」
始「今すぐに止めろ」
伊坂「なぜ人間を庇う?」
始「貴様に答える必要はない!変身‼?」
チェンジ
カリス「はっ‼?」
おい、なんだあれ?人が浮いてるぞーそれになんだあの怪物は?わーきゃー

シャルル「闇の鼓動シャル‼?」

マナ「嘘⊠こんな時に‼?」
ピコンピコン
橘「この家にいるぞ!」
カメラマン「うわぁ!なんだ外に化け物がいるぞ!」
セバスチャン「皆さま落ち着いてください!さぁこちらから避難を」
あゆみ「でも娘たちが」
セバスチャン「安心してください、既に避難済みです」
健太郎「本当だ!マナ達がいない!」
宗吉「急ぐぞ!」
虎太郎「きっと僕も避難した方がいいんだろうな」ダッ!

マナ「よしみんないったね、行くよシャルル!」
シャルル「シャル!」
六花「私たちも行くわよ」
ラケル「了解ケル」
ありす「ランスちゃん準備はよくて?」

ランス「勿論でランス～」
橘「剣崎！俺達も行くぞ！」シュプシュー
剣崎「了解です橘さん！真琴！」シュプシュー
真琴「えぇ！行くわよダビィ!!？」
ＤＢ「その顔待ってたわ」
マナ、六花、ありす、真琴「「「プリキュア!!？ラブリンク!!？」」」
剣崎、橘「「変身!!？」」
ＬＯＶＥ
ターンアップ

ハート「漲る愛!!？キュアハート!!？」
ダイヤモンド「英知の光！キュアダイヤモンド!!？」
ロゼッタ「ひだまりポカポカ、キュアロゼッタ！」
ソード「勇気の刃！キュアソード!!？」
ブレイド「俺達も何か名乗った方がいいですかね？」

ギャレン「敵の位置も分かって無いのになのる必要なんてないだろ！」
ブレイド「それもそうですね！」
ダイヤモンド「みんな！屋根の上よ！」
ロゼッタ「既に誰か戦っていますわ！」
カリス「フッ！」
伊坂「…」ヒュン
ギャレン「誰だあいつ？」
ハート「あの人は！」
ダイヤモンド「何度か私を助けてくれた仮面ライダー！」
ソード「ただ敵か味方かわからないわ」
ブレイド「きっと味方だろ！おい！俺も手伝うぞ！」
伊坂「流石にこの人数じゃな…こいつに相手してもらうとするか」
センチピトーアンデッド「シャー！」
伊坂「また会おうカリス！」
カリス「待て！逃げるのか？」
伊坂「そう焦るな、またすぐ会える」
センチピトー「シャー」

ロゼッタ「きますわよ！」
ファイヤ
ギャレン「はっ！」
センチピトー「ぐっ！」
ギャレン「手を出すな！今回こそアンデッドかもしれない！ジコチューはもううんざりだ‼？はっ」
センチピトー「しゃっ！」
ギャレン「うわあぁぁ‼？」
センチピトー「シャー！」ピュッ！
ダイヤモンド「え？何か飛んできた？」
カリス「‼？」
トルネード
パシュン
カリス「気をつけろ！今の液体は毒だ」
じゅー
ロゼッタ「お家が溶けていますわ！」
サンダー

ブレイド「ウェイ！」
センチピトー「ぐわっ！」
ブレイド「未だハート！浄化しろ！」
ハート「わかった！貴方に届け！マイスイートハート!!?」
センチピトー「ラーブラブラーブ」
ハート「やった！カードだ！」
ギャレン「よくやった！ハートそれをこっちに！」
ハート「わかった！ってえ？」
ダイヤモンド「カードが勝手に」
シュンシュン
カリス「なぜ俺のところに？」
ギャレン「どう言うつもりだ!!?人を馬鹿にするのも大概にしろ!!?」
ダイヤモンド「ちょっとやめてくださいよ橘さん！マナだって悪気があるわけじゃないんですから!!?」
ブレイド「そうですよ！アンデッドも倒せたんですし！まずは喜びましょう」
ギャレン「…」
ブレイド「それよりあんた！助かったよ！あんたが戦ってくれてたおかげで被害も少

なかった！ありがとう！やっぱり味方なんだよな？だったらこれからも一緒にたたかって…」
カリス「はっ！」
ブレイド「うわぁ‼？」ゴロゴロ
ソード「一真！やっぱり貴方‼？」
カリス「言ったはずだ…全てが俺の敵だと…」
ブレイド「どう言う事なんだよ…」
ダイヤモンド「本当にそうなの？」
カリス「…」
ダイヤモンド「貴方何度も私を助けてくれたじゃない！私は貴方を敵だとは思えない！」
カリス「勝手に思っていろ」ぶぅぅぅぅん
ダイヤモンド「行っちゃった…」
ソード「謎が多い男ね…」
ハート「ねぇまこぴー！」
ソード「！」
ロゼッタ「私たちこの時を待っておりましたわ」

ハート「貴方と仲間になりたいの！」
ソード（私も同じだ…私もこの子達の仲間になりたい…だからここに来たんだ…）
ソード「ありがとう」
ギュッ！
ハート「まこぴー」ギュッ
ソード「…」
ブレイド「よかったな真琴」
ベール「お取り込み中すまないね」
ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ、ソード、ブレイド、ギャレン「「「「「!!?」」」」」
ソード「貴方は…!!?」
ブレイド「お前!!?いつかの!!?」
ロゼッタ「どちらさまですの!!?」
ベール「名乗る必要はない俺がようがあるのはお前だけだ」パチンッ
ブレイド「なんだ？」シュン
ギャレン「剣崎!!?」
ソード「貴方!!?一真をどこにやったの⊠」
ベール「敵に教えるわけないだろ、じゃあな」シュン

ソード「待ちなさい！」
ソード「一真を…一真を返しなさい‼?私の唯一の家族を返せ‼?」
ダイヤモンド「そんな…」ペタン
ギャレン「剣崎…」
ソード「一真…」
ソード「一真ぁぁぁぁぁぁぁ‼?」

新章開幕最強のライダー編

次回囚われた剣崎

第二章　最強のライダー編

囚われた剣崎

囚われた剣崎

セバスチャン「…」

ありす「どうですかセバスチャン？」

セバスチャン「申し訳ありません。町中の監視カメラを確認しましたが剣崎様の姿は見当たりませんでした」

真琴「そんな！」

橘「それも仕方ないだろう…剣崎はあの男にテレポートに近い者で連れ去られたんだ…監視カメラに映ることなんてないだろう…ごほっ…！ごほっ！」

真琴「橘さん！」

マナ「橘さん大丈夫ですか⁉？」

真琴「身体…やっぱり治ってないのね…」

マナ「身体って、橘さんどこか悪いんですか？」

橘「はぁ…元々俺は身体を治してもらう条件で君達と共に戦っていたんだ…はぁ…ご

ほっ！」
セバスチャン「橘様その事なのですが」
橘「！」
橘「何か…何かわかったのか‼？」
セバスチャン「…」
橘「何がわかったんだ‼？教えろ‼？」
ありす「落ち着いて最後まで聞いてください…四葉の化学班で精密に検査した結果…健康そのもの、身体に一切異常は見当たりませんでした」
六花「嘘！こんなに苦しんでる人が健康そのもの？」
橘「ふざけるな！俺はあんたを信頼して協力してきたんだぞ‼？」
ありす「最後まで聞いてください、身体は正常ですが…問題はライダーシステムです」
橘「！」
真琴「！」
ありす「セバスチャン」
セバスチャン「はい、橘様こちらの図をご覧ください」
橘「これは…？」
セバスチャン「ライダーシステム、及びラウズカードの研究結果です。」

マナ「ラウズカード？」
真琴「ライダーが変身するために使うカードよ」
シャルル「ラビーズみたいな物シャルね」
セバスチャン「ライダーシステムは、アンデッドと融合して戦う力なので、戦う際に恐怖心が根底にあるとアンデッドに精神を蝕まれる可能性があり、それを阻止する為脳に破滅のイメージを生み出し、戦いに不向きの状態にするようです」
橘「恐怖心…だと…☒」
真琴「橘さん…？」
橘「俺を臆病者と言いたいのか‼？」
橘「あんた達を信じた俺が馬鹿だった！俺は俺のやり方で身体を治す！」
ありす「橘さん…恐怖心と言うものは誰にでもあります。」
橘「うるさい！今日から俺はお前達の敵だ…！はぁ…俺の邪魔をする奴は全て敵だ‼？」
ガチャン
マナ「待って橘さん！」
ありす「待ってください」
マナ「ありす？」

ありす「橘さんは私達がどうかします…なので今は剣崎さんの事を考えましょう」
六花「でも剣崎さんは防犯カメラじゃ見つからないって橘さんも言ってたじゃない」
ありす「では、剣崎さんを誘ったのは誰ですか？」
六花「！」
ラケル「ジコチューケル！」
ありす「セバスチャン、アンデッドサーチャーの出力を最大に」
セバスチャン「承知いたしました」
六花「なるほど、これでアンデッドかジコチューが少しでも暴れ出せば」
ありす「剣崎さんの位置がわかります。しかし暴れ出してからではないと反応しないので」
マナ「わかった、手分けして探せばいいんだね」
真琴「先に見つければ被害も少なくなるわ」
マナ「よし、じゃあみんなで剣崎さんを助けに行こ！」

ベール「ライダーも牢獄に入れられたら無様だな」
剣崎「おいどこなんだここは！ここから出せ！」
伊坂「まだそう言う訳にはいかない」
剣崎「お前！ジコチューの仲間だったのか！」
伊坂「ライダーシステムの適合者を調べなければいけないからな」
剣崎「ライダーシステムって事は…まさか橘さんもさらうつもりか」
ベール「そう言う事だ、まぁお前はここで指を咥えて待っていればいいんだ」
剣崎「お前ふざけっ」ちくっ
剣崎「うっ」
剣崎「ＺＺＺ」
ベール「さてこれからどうするつもりだ？」
伊坂「たった今ライダーシステム一号のギャレンが見つかったらしい。聞くところによると奴の肉体は限界だそうじゃないか。だから私が直々に迎えに行こうと思ってな」
ベール「またカリスに邪魔されて失敗するのがオチじゃないのか？」
伊坂「安心しろ策はある」
ベール「まぁうまくいったらまた呼べよ」シュン

橘「恐怖心…俺の心に…恐怖心…」
ぶうううううん‼?
橘（なんだあの車俺を見て止まったぞ?）
ガチャ
伊坂「…」
橘「貴様さっきの…俺になんのようだ?」
伊坂「フッ」
伊坂「‼?」ドン！
橘「！」ヒュン！
橘「！」ゴロゴロ

橘（爆発した☒）
橘「お前は一体☒」シュプシュー
伊坂「！」ドンッ！
橘「変身‼？」
ターンアップ
ギャレン「はっ！」バンッ！
伊坂「…」キンッ！
ギャレン（なんだこいつ！何故俺の攻撃が！）
伊坂「…」ドンッ！
ギャレン「うわっ‼？」ガチャン
橘「くっ…‼？」
伊坂「殺しはしない少し眠ってもらうだけだ」
橘（ここまでか？）
ロゼッタ「カッチカチのロゼッタウォール！」
伊坂（あれはクローバーの妖精…？）ドンッ！
橘「ありす…！」
セバスチャン「さぁ橘様車へ」

橘「…」ダッ！
ロゼッタ「…」ダッ！
ぶゥゥゥゥゥん！
伊坂「…逃げられたか」
始「待て」
伊坂「早い再会だなカリス」
始「…」スッ
伊坂「まぁ待てそう慌てるな、今お前とことを構える気はない」
伊坂「それより俺と組まないか？」
始「組む☒」
始「一万年前から俺達に組むと言う言葉はないはずだ」
伊坂「戦うしかないそんな事はわかってる、でもその前に俺とお前で雑魚達を片付けようと言ってるんだ」
始「断る」
伊坂「だがお前もライダーシステムやプリキュアによって封印される可能性がある」
始「奴らに俺は倒せない」
伊坂「万が一という事もある、俺は研究材料を手に入れた。どうだ一緒に調べてみな

いかモルモットを?」

剣崎「はっ!ここは?なんで俺は縛られて…!」
研究者「始めろ!」
剣崎「おい!やめろ!話せこんにゃろ!」

ぶうううううん

橘「ふぅ…」
虎太郎「君大丈夫？」
橘「お前は…何故この車に載っている？」
セバスチャン「どうやらジコチューから逃げる最中に車がエンストしたそうなので」
虎太郎「面目ないです」
橘「それより何故俺を助けた」
ありす「橘さんがアンデッドに襲われた事を考えたら不安になったんです」
橘「…」

研究者「おいまとめてくれ」
伊坂「…」ガチャ

始「…」
研究者「お待ちしておりました」
伊坂「どうだブレイドの身体は？」
研究者「はい、やはり体細胞のヘイブリット限界が通常では考えられない数値示しています」
伊坂「後は戦闘時にカテゴリーAとの融合係数がどれぐらい変動するかだ」
研究者「はい」
始「…」チラッ

剣崎「離せこのやろぉ‼？こっからっだせっこのやろ‼？」
兵士「少しは大人しくしてろ‼？」

始「フッばかな男だ」
ガチャ
剣崎「人の身体を玩具みてぇに調べやがって！」
研究者「なんだ？なんか言ったか⊠」髪の毛ガシッ
剣崎「…」

剣崎「！」ドンッ
研究者「うわっ！」
グサッ
剣崎「うっ」バタッ
研究者「伊坂さん…」
伊坂「油断するな、次の実験までしっかり監視しておけ」
研究者「はい！」
ガチャ
伊坂「もうしばらく付き合ってくれ、後で面白いものを見せてやる」
始「結構だ…時間の無駄だ」
伊坂「これを見てもそう言う事が言えるかな？」
始「？」
伊坂「…」ピッ
始「？」
始「六花ちゃん…？」

マナ「剣崎さーん‼?」
六花「マナ、剣崎さんは捕まってるんだから呼び返してくれるわけないじゃない」
マナ「あ、それもそっか」
六花「もー」
マナ「シャルル達はどう?」
シャルル「今のところ闇の鼓動は聞こえないシャル」
ラケル「一真…大丈夫ケル?」
マナ「まぁ剣崎さんはジコチューに拐われた訳だし、闇の鼓動が聞こえないんだったら暴れてないって事じゃない?」
マナ「ん?なにあれ?」ダッ
六花「どうしたのマナ?」
マナ「!」

マナ「見て！みんな！」
六花、シャルル、ラケル「「？」」
六花「なにこれ？卵？」
シャルル「おっきいシャルね」
六花「ラクダの卵の一回り大きいわよ？」
マナ「よっ」
六花「あ、ちょっとマナ」
マナ「…」
マナ「これなにか動いてるよ！」
ラケル「怪獣の卵かもしれないケル！」
六花「ありえそうで怖いわ」

男「…」

伊坂「驚くのはまだ早いぞカリス…始めろ」
男「…」コクッ
伊坂「この男が何をしているかわかるか？」
始「まさか…」
伊坂「万が一お前が俺に逆らった場合、この男は爆弾を持ち２人に特攻する」
始「貴様…！どう言うつもりだやめさせろ！」
伊坂「いいのかそんな態度とって？俺がスイッチを入れれば全てが吹っ飛ぶんだぞ？」
始「やってみろ！今すぐこの場で貴様を…」
伊坂「なんでそんなにむきになる？人間如きに感情を動かしてお前らしくないぞカリス？」
始「うるさい！貴様に何がわかる？」
伊坂「あぁわからないね…人間なんてマインドコントロールして使う道具に過ぎない…お前は堕落した」

始「決着をつけよう…こんな姑息な手を使うとはお前こそらしくない！」
伊坂「爆弾はさっきいた男の発案でねぇ…流石人間は人間の感情をよく理解している…そして人間になり始めたお前の感情もな」
始「俺は…」

橘「！」
橘（うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？）
橘「うわぁぁ！」
ありす「橘さん⁉？」
橘「‼？」
橘「はぁ…はぁ…またあのイメージ…」
ありす「やはり恐怖心が…」

橘「黙れありす…そんなものはない…あってたまるか…」
ありす「橘さん…」
虎太郎「わっかんないなー」
橘「何？」
虎太郎「なんで突っ張るのさ？怖いものはあって当然なのに。俺なんかいっぱいあるよ？ゴキブリ、カマキリ、雷、ミミズ！それと…お饅頭！わぁ！饅頭こわーい」
橘「人をおちょくってるとぶっ飛ばすぞっ‼？」
虎太郎「で、でもさ…見てよあの人達を…あそこにいる人達が、全員が何か怖いものがあったり不安を抱えてるんだよ」
ありす「…」
虎太郎「将来の不安、家族への不安、病気への恐れ…だからいいんだよな人間って、頭の上にちょこんと恐怖心や心配を乗せてるから愛しんだ…怖さを知らない人間は一生懸命生きないよ？心配のない人間は人を好きになんない。なんか俺そう思うんだよね」
橘「…」
橘「フッ！馬鹿馬鹿しいそうやって詩人きどってくっちゃべってろ！」
ありす「ふふっ」
橘「ありす…なにがおかしい？」

ありす「それが橘さんの本音ですか？」
橘「何が言いたい？」
ありす「私にはそうは聞こえません。橘さんは私を恐怖心から救ってくれた1人です、今の虎太郎さんの言葉…貴方が一番よくわかってるはずですよ？」ニコッ
橘「…」
橘（俺は…俺は！）
橘「ありす…全方位最大周波数でアンデッド追ってみろ。正確な位置は掴めないがどんな微弱な反応も感知する」
ありす「橘さん…！わかりましたわ」
ありす「セバスチャン」
セバスチャン「はい」カチッ
橘「おおよその範囲がわかったら、そこに絞って捜索する」
ありす「橘さん…信じていましたよ」
橘「なんのことだ？俺は剣崎を拉致した組織に烏丸も拉致されている可能性があるから協力するだけだ」
橘「…」くるっ
虎太郎「？」

橘「決してお前の言葉に打たれた訳じゃないからな」
虎太郎「わかってるって」ニコッ
橘「それとお前は剣崎や俺達が無事でいる事を祈っていろ。お前にできるのそれくらいだ」
虎太郎「わかった！祈るよ！」

剣崎「うっ」ドサっ
剣崎「…？」
剣崎「なんだよここ？」
剣崎「今度は何を始めようって言うんだよ？」
トリロバイトアンデッド「う”ぅ」

剣崎「アンデッド！」
伊坂「手加減してやれ」
トリロバイト「…」
剣崎「!!?」
伊坂「ここから出ることはできないんだ」
剣崎「なんだお前！何をやらせようってんだ俺に⊠」
伊坂「戦いだよ。君がそのアンデッドと戦うところを見てみたい」
剣崎「ふざけるな！誰がお前なんかの言いなりに！」
トリロバイト「ぐぅ!!?」ブンッ
剣崎「！」ヒュン
剣崎「くそっ！やるしかないのか？」シュップシュー
剣崎「変身!!?」
ターンアップ
剣崎「はぁぁぁ!!?」
ブレイド「ウェイ！」ズバっ!!?

伊坂「よしやれ」
研究者「はい」カタカタ
研究者「テロメア配列計測開始しました！現在の融合係数は５１６ＥＨ」
伊坂「そのまま計測を続けろ」
始「…」

トリロバイト「ぅぁ！」ブンッ
ブレイド「うわぁ！」ゴロゴロ
ブレイド（くそッ！こっちは必死に戦っているのに！あいつは今一体どんな顔をして見て…）
始「…」
ブレイド「あいつは…六花ちゃんの家にいた！」
ブレイド「あいつふざけやがって…この野郎‼？この組織の人間だったのか‼？」
ブレイド「‼？」
ブレイド「まさかあの時…六花ちゃんの手紙が燃やした犯人って！」

始「…」
ブレイド「あいつかぁ‼？」

研究者「‼？」
研究者「融合係数６２４ＥＨ☒上昇しています！」
伊坂「‼？」
研究者「７１０ＥＨ☒まだ上がっています！」
伊坂「どう言う事だ☒そんなに激しく上昇するとは」
始「…」
始「あいつは怒りを力にする…俺への憎しみが…あいつの数値を上げているんだ…」
始「うっ‼？」
始「はぁ…はぁ…‼？」
研究者「融合係数！１０００を超えました‼？」
伊坂「カリス⁉？」

始「ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
始「ふぅ…‼?ふぅ…‼?」
チェンジ
カリス「‼?」パリンッ
ブレイド「お前!」
カリス「はっ‼?」ブンッ
ブレイド「ぐわぁ‼?」

研究者「伊坂さん!中止しましょう‼?」
伊坂「いいんだこれで…カリスも計測しろ」
研究者「はい!」かたかた
伊坂「この瞬間を待っていた…争い…諸共倒れてしまうがいい…この世にライダーもプリキュアもいらない…私が作る究極の一体でいいんだ」

ピコンピコン
セバスチャン「見つけました」
虎太郎「本当ですか！」
ありす「反応を見るに…ブレイドがアンデッドと戦っていますね」
橘「場所は☒」
セバスチャン「ここから南東１１間キロです、早急に向かいます」
虎太郎「よし今すぐ向かおうよ！」
セバスチャン「はい、ですが虎太郎様は早急に降りていただく必要があります」
虎太郎「どうしてですか？僕も行きますよ！」
ありす「いえ、いけませんわ虎太郎さん」
虎太郎「え？どうしてだよありすちゃん」
ありす「こちらを見てください」
橘「これは‼？」
虎太郎「どうしたのさ？」
橘「ブレイドの周りにアンデッドが三体もいる‼？」

虎太郎「三体も!!?」
ありす「ですから危険すぎます」
橘「降りろ！降りろ！」
虎太郎「う、うん!!?」ガチャ
ありす「急ぎますわよセバスチャン」
セバスチャン「はい」
ぶぅぅぅぅぅん！
虎太郎「剣崎君どうか無事であって」

研究者「ライダーシステム１号のギャレンが向かって来ています！」
伊坂「まさかそっちから来てくれるとはな」
伊坂「早く来いギャレン」
研究者「融合係数１０２０ＥＨ。カリスの融合係数は９７９ＥＨです」

伊坂「ブレイドに引きずられるようにカリスも数値が上がる…フフフッ！これがバトルファイトだよ…一万年前の再現だ‼？」
ドンッ！
研究者「ギャレンが到着したみたいです！」

橘「剣崎！」
ありす「剣崎さん！」
橘「変身‼？」ガチャン
ありす「プリキュア‼？ラブリンク‼？」
ターンアップ
ＬＯＶＥ
ロゼッタ「貴方は…！」
カリス「お前は…他のプリキュア達は？」
ロゼッタ「まだここには来ていませんよ！それよりも、なぜ貴方は剣崎さんと？味方じゃないんですの☒」
カリス「言ったはずだ…フッ！…全てが俺の敵だと‼？」

トリロバイト「ぅぅ‼?」ブン
ロゼッタ「！」ガシッ
トリロバイト「⁉?」
ロゼッタ「ふんっ‼?」ブンッ
トリロバイト「ぅわぁ‼?」
ロゼッタ「貴方がどのようなお考えでマナちゃん達に近づいたのか別れませんが…2人に危害を加えるなら私が全力でお相手します」
カリス「望む所だ…はっ！」
ギャレン「フッ！はっ！」
トリロバイト「ぅぅ‼?」
ギャレン「俺には恐怖心などない‼?」

伊坂「この際だ、ギャレンの融合係数も計測しろ」
研究者「はい」カタカタ

伊坂「…」チラッ
伊坂「!!?」
伊坂「まさかお前も来てくれるとはな…」
伊坂「クローバーのプリキュア」
伊坂「ギャレンの融合係数は？」
研究者「はい融合係数５４３ＥＨ…いえ！数値が下がっています！」
伊坂「これが烏丸が言っていたライダーシステムの弊害か…脆い人間の恐怖心が引き金となってＡアンデッドとの融合の不具合が起き、戦う力をダウンさせる」

ダビィ「真琴！闇の鼓動ビィ！」
真琴「感知できたのね！」
ダビィ「真琴急ぐビィ！」

真琴「わかってるわ！」
真琴「プリキュア！ラブリンク‼？」

トリロバイト「ヴァ‼？」ブンッ
ギャレン「うわぁ‼？」ガチャン
橘「‼？」ゴロゴロ
橘「しまった…変身が…」
ブレイド、ロゼッタ「「橘さん！」」
橘「ベルトを…取らなければ…」
トリロバイト「…」サッ！
橘「‼？」
橘「く…来るな‼？」
トリロバイト「…」すたすた

橘「うぅ…!!?」サッ
橘「!!?」
トリロバイト「…」すたすた
橘「はぁ…はぁ…うっ…」
橘（目の前の化け物が…恐ろしくてしょうがない…！震えが…止まらない…死ぬ、殺される、嫌だ、怖い怖い怖い怖い）
橘「はぁ…はぁ…！はああ…」
橘「ウワアアアア～～」

次回　不思議な卵、アイちゃん誕生